

ART DE ON!

アートでオン!

ACTIVITY REPORT

青森市の「アートで音楽のあるまちづくり」という方針を推進する活動にイベントから関わり、既に4年が経過したことから“人生は短く芸術は永い”という謂からも、ここで活動の記録と考えたことをまとめることにしたいと思います。

まず、わたしたちが到達目標とした「文化芸術創造都市あおもり」のコンセプトとイメージの確立のために自ら実施した事業として、フォーラムとパイロット事業があり、他に、文化芸術助成事業を引継ぎブラッシュアップしました。この助成事業で注力した点は、単に一回性の事業に助成するのではなく、創造的で社会を変え得る可能性を秘め、且つ継続発展性のある事業を対象として募集し、それを市民みんなで共有して支援していくことができるよう、各事業PRも兼ねた公開プレゼンテーション審査の場を設けたことです。企図するところは、発表側、傍聴側を越えて意志を持った市民の主体性が反響し合い、それらがつながり拡大していくことでまちの内発性を高め、文化芸術による社会変革を引き起こすことにありました。素晴らしい可能性を秘めた事業には喝采を送り、この助成をまちの文化的先行投資と位置づけ、不足は市民みんなで補完し合い一緒になって育てていく、そのような観点でスタートしたわけです。この中から、確実にまちに根付き、刺激を与え続けている団体も出て来たことは、誠によろこばしい限りです。

ところで、平成25年7月より「アートでオン！」として、前述他、発表の場支援事業等行っていますが、当初から社会に問いかけ、発信してきたことには変わりありません。

それは、青森ほど地理・環境的にも恵まれ、それ故独自で豊富な文化的資源を有する所は他に無く、ただ残念なことに、それらは夜空に個別に輝く星のまま、全体として星座を構成するためのナラティブが存在しない、そこで、これらのヴァナキュラーな文化的資源を活かした新たな都市（文化芸術創造都市あおもり）を構築すべきであり、そのためには、行政と連携しながらも、独立・継続性のある文化芸術専門機関「アーツ・カウンシル」の設立が必要ではないかということです。

私たちは、知らずしらずの内に、経済的効率やバーチャルな世界にドップリと浸かってしまっていました。気づくと、隣に座っている人の体温や感触を忘れ、ひたすらスマートホンを覗き込む生活をしています。逆転してしまった遠近感のなかで、かけがえのない他者の存在を認識させてくれる交感の場である、まち。この場の形成のためにアートは機能するものと思っていますし、今まちづくりにアートが関わることの本質的なところだと考えています。

さて、このまちの新しい未来は、それを築こうとする意志と、他者たちによる協働によって実現されることでしょう。まだまだ中途ですが、その芽生えを確かに感じているところです。

こころ躍ることではありませんか、未来は私たちの手の内にあるのです。

アートでオン！活動年表

2013（平成25）年度

「アートでオン！」発足（7/11）

第1回アートでオン！フォーラム「アートで音楽のある青森を夢みて」（11/23開催）

冬のねぶた音楽祭・フォーラム「創造都市の原点『ねぶた』・ジャズアレンジねぶた囃子（3/9開催）

アートでオン！会議開催（毎月1回）

2014（平成26）年度

ミチバタ版画（9/13開催）

第3回アートでオン！フォーラム「カルチュラル・オリンピアード 青森におけるアート政策の可能性」（3/8開催）

アートでオン！会議開催（毎月1回）

2015（平成27）年度

アートで音楽のあるまち青森・文化芸術創造活動助成事業 公開選考会（6/28開催）

中心商店街空き店舗を活用した現代アート作品のインスタレーション展（9/12～23開催）

第4回アートでオン！フォーラム「～アーツカウンシル プロローグ～」(10/31開催)

アートでオン！会議開催（毎月1回）

2016（平成28）年度

アートで音楽のあるまち青森・文化芸術創造活動助成事業 公開選考会（7/9開催）

青森市アートで音楽のあるまち "創造の場づくり" 支援事業～青い森のトボス～（9/2～30開催）

第5回アートでオン！フォーラム「～夢が叶えられる街では～」(10/31開催)

アートでオン！会議開催（毎月1回）



P03



P05



P08



P11



P04



P07



P10

事業概要

第1回アートでオン！フォーラム P02
「アートで音楽のある青森を夢みて」

冬のねぶた音楽祭・フォーラム P03
「創造都市の原点『ねぶた』・ジャズアレンジねぶた囃子

ミチバタ版画 P04

第3回アートでオン！フォーラム P05
「カルチュラル・オリンピアード 青森におけるアート政策の可能性」

平成27年度アートで音楽のあるまち青森 P06
文化芸術創造活動助成事業

中心商店街空き店舗を活用した現代アート作品のインスタレーション展 P07

第4回アートでオン！フォーラム P08
「～アーツカウンシル プロローグ～」

平成28年度アートで音楽のあるまち青森 P09
文化芸術創造活動助成事業

青森市アートで音楽のあるまち "創造の場づくり" 支援事業 P10
「～青い森のトボス～」

第5回アートでオン！フォーラム P11
「～夢が叶えられる街では～」

講演詳細

第1回アートでオン！フォーラム 基調講演 吉本光宏氏 P12
「アートから都市を構想するー創造都市とアーツカウンシルを巡って」

冬のねぶた音楽祭・フォーラム基調講演 加藤種男氏 P12
「創造都市の原点『ねぶた』」

第3回アートでオン！フォーラム 基調講演 湯浅真奈美氏 P14
「カルチュラル・オリンピアード 青森におけるアート政策の可能性」

第4回アートでオン！フォーラム 講演 平田オリザ氏 P17
「新しい広場をつくる」

第5回アートでオン！フォーラム トークセッション あがた森魚氏 谷田恵一氏 P19
「～(映画文化をとおして) 青森と函館どっち？～」

実行委員紹介 P22

新聞掲載記事 P24

ウェブサイト紹介 P25

オブジェ紹介 P25

事業概要

第1回アートでオン!フォーラム 「アートで音楽のある青森を夢みて」

目 的

青森に暮らす人々が創造的な生活を楽しみながら、街や人々を元気にすることを目標とする機会を作る。

効 果

“創造都市”（創造活動で街づくりを盛り上げている都市）および“アーツカウンシル”（公的助成金の分配・評価を行なう機関）について学び考え、青森での文化芸術活動を盛り上げていくためのアーツカウンシル設立へ向けた第一歩となった。

英国のチャールズ・ランドリーらによって提唱された Creative City（創造都市）。そしてアートへの助成などを通して地域活力創出を担うアーツカウンシルについて、日本における第一人者である吉本光宏さんを迎え、国内外の創造都市の具体例や、日本の文化政策の分野で注目されているアーツカウンシルについての考え方などを伺いながら、参加者とともに青森におけるまちづくりへの可能性を考えるパネルディスカッションを行いました。

第1部 基調講演 9：45～10：45

「アートから都市を構想する—創造都市とアーツカウンシルを巡って」

講演詳細は P12



講師 吉本 光宏 氏

株式会社ニッセイ基礎研究所社会研究部主席研究員 / 芸術文化プロジェクト室長

1958 年徳島県生まれ。早稲田大学大学院修了（都市計画）後、社会工学研究所などを経て 1989 年からニッセイ基礎研に所属。文化施設開発やアートワーク計画のコンサルタントとして活躍する他、文化政策や創造都市などの調査研究に取り組む。文化審議会文化政策部会委員、東京芸術文化評議会専門委員、（公社）企業メセナ協議会理事などを歴任。主著に「再考、文化政策（ニッセイ基礎研所報）」「アート戦略都市（監修、鹿島出版会）」など。



創造で街を元気に
青森でのアーツカウンシル設立をめざして。

会 場 BLACK BOX 2F BLACK HALL
開催日時 2013（平成 25）年 11 月 23 日（土・祝）
9：30～12：00
来場者数 65 名



第2部 シンポジウム 11：00～12：00

パネリスト 吉本 光宏氏（株式会社ニッセイ基礎研究所）
飯田 高誉（青森県立美術館美術統括監）
竹浪 比呂央（ねぶた師）
立木 祥一郎（合同会社 tecolLC 代表）

コーディネーター 嶋中 克之（アートでオン! 会長）



主催：アートでオン！
共催：青森市教育委員会
後援：青森県 / 東奥日報社 / 毎日新聞青森支局 / 朝日新聞青森総局 / 読売新聞青森支局 / 陸奥新報社 / デーリー東北新聞社 / NHK 青森放送局 / 青森放送 / 青森テレビ / 青森朝日放送 / エフエム青森 / 青森ケーブルテレビ

事業概要

冬のねぶた音楽祭・フォーラム 「創造都市の原点『ねぶた』・ジャズアレンジねぶた囃子

目 的

伝統的な地域の祭りである「ねぶた」「ねぶた」を中心にした市民主導のまちづくりの可能性について考える。

効 果

県内各地の「ねぶた or ねぶた囃子」を聴き比べることで、その多様性を認め合った。講演では祭りの本質に触れ、さまざまな文化の発掘が高齢者を元気にすること、地域の人たち自身が楽しむことの大切さを再認識できた。

青森市をアートで音楽のある元気な街にしたい。そんな思いからはじまったアートでオン! 今回は、知っているようで知らない他の街の囃子が結集し、「ねぶた囃子」を聴き比べるミニ音楽祭と、アートで街を元気にする達人をゲストに迎え、ねぶたから街の元気の秘訣について考えるフォーラムを開催しました。

開会 ねぶた・ねぶた囃子演奏 14：00～14：45

弘前ねぶた－下新町ねぶた愛好会 [弘前市]
つがる市ネプタ－縄文荒吐会 [つがる市]
平川ねぶた－町居ねぶた会囃子組 [平川市]
五所川原立佞武多－五所川原立佞武多運行団体協議会 [五所川原市]
黒石ねぶた－正調黒石ねぶたばやし保存会 [黒石市]
青森ねぶた－マルハニチロ佞武多会 囃子方「海鳴」 [青森市]

フォーラム 「創造都市の原点『ねぶた』」 15：00～15：15



基調講演

講師 加藤 種男 氏

公益社団法人企業メセナ協議会 代表理事専務理事

全国各地の市民主導のアートプロジェクトを応援し、文化芸術振興を地域振興と結びつけ、地域を創造する仕組みを展覧している。アサヒアートフェスティバル（AAF）、文化芸術創造都市横浜等の立ち上げに関わり、市民、企業、行政を結びつける公益ネットワーク形成に取り組む。2008 年度芸術選奨文部科学大臣賞受賞。

主催：アートでオン！
共催：青森市教育委員会

後援：東奥日報社 / 毎日新聞青森支局 / 朝日新聞青森総局 / 読売新聞青森支局 / 陸奥新報社 / デーリー東北新聞社 / NHK 青森放送局 / 青森放送 / 青森テレビ / 青森朝日放送 / エフエム青森 / 青森ケーブルテレビ

会 場 青森市文化観光交流施設
ねぶたの家ワ・ラッセ イベントホール
開催日時 2014（平成 26）年 3 月 9 日（日）14：00～17：10
来場者数 180 名



シンポジウム 15：15～16：50

パネリスト 加藤 種男氏
鹿内 博氏（青森市長）
立木 祥一郎（合同会社 tecolLC 代表）
竹浪 比呂央（ねぶた師）
張間 陽子（ラジオパーソナリティ）

コーディネーター 嶋中 克之（アートでオン! 会長）

ジャズアレンジねぶた囃子 SESSION 17：00～17：10

張間陽子 with JazzBand “moon”



路上より街並へ「版画と街」を繋げる試案 ミチバタ版画

目 的

「AOMORI PRINT トリエンナーレ 2014」会場前の道路で街行く人を巻き込んで作品を制作。刷られた版画はその街の中に解き放つことで、版画と街並と作った学生の心にアート魂を贈りたい、と企画した。

効 果

市内中学生の作品を中心商店街にアートな日除けとして飾ることで、生徒達のミチバタでの創造活動および作品が、商店や企業とそれぞれの関係性を持ち、街と一体となって道行く市民の目を楽しませることができた。

市内中学生の作成した版画を、版画家・橋本尚恣氏の指導の下、市街地の道路でロードローラーを使って帆布に刷りました。できあがった版画は「AOMORI PRINT トリエンナーレ 2014」会期中、「青森市新町商店街振興組合」と「昭和通り振興会」のご協力店に「版画日除け」として展示しました。



講師 橋本 尚恣氏
美術家

1957 年 北海道函館市に生まれる
1976 年 青森県立青森東高等学校卒
1981 年 岩手大学教育学部特設美術科中退
1985 年 東京芸術専門学校（T・S・A）卒
1996 年 AURA 版画工房を青森市内にて開設
2009 年 平成 20 年度岩手県美術選奨受賞
個展・グループ展・ワークショップ多数

中心商店街の道端に、ロードローラー出現
→ 版画、刷っちゃった！

制作会場 青森市民美術展示館前 公道
開催日時 2014（平成 26）年 9 月 13 日（土）10：00～16：00
展示期間 2014（平成 26）年 9 月 13 日（土）～28 日（日）
「AOMORI PRINT トリエンナーレ 2014」会期中
展示協力店舗数 33 軒
参加生徒数 14 名



ミチバタ版画とは

プレス機の代わりに道路を舗装・造成するロードローラーを使って大型版画を作るワークショップ。
橋本尚恣氏の「挑戦的な版画を子ども達の記憶の中にも楽しくとどめたい」という思いから始まりました。
「キッズ・アート・ワールド 2002」（三戸町・2002 年）、「ミチバタ版画 2003 in N-project」（青森市・2003 年）、「C-Point in AJIGASAWA 2005」（鯉ヶ沢町・2005 年）、「キッズ・アート・ワールド 2006」青森市八甲田丸前広場（青森市・2006 年）で行われました。



第3回アートでオン!フォーラム 「カルチュラル・オリンピアド」 青森におけるアート政策の可能性

オリンピックはスポーツだけじゃない、
文化の祭典でもある！

目 的

2020 年に開催される東京オリンピックを前に、文化振興の面でも祭典を盛り上げる「カルチュラル・オリンピアド」について学ぶ。

効 果

ロンドンオリンピックの際に行われた数々のプログラムについて紹介してもらい、スポーツの祭典と同じタイミングで文化振興を行なうことで得られる地域活性化や雇用創出についての具体例を知り、青森でのアート活動展開の可能性を含め、考えることができた。

2020 年、東京オリンピックでは、イギリスでの「カルチュラル・オリンピアド」にならない、スポーツ競技のみならず、文化振興によってオリンピック効果を波及させようとしています。ブリティッシュ・カウンシルのアーツ部長、湯浅真奈美さんをお招きして、イギリスでのカルチュラル・オリンピアドの成果と、青森におけるアーツ展開の可能性、アーツカウンシルへの期待などについて基調講演をいただいたあと、青森市長などを交え、トークセッションを行いました。

フォーラム 「カルチュラル・オリンピアド」 青森におけるアート政策の可能性

アートでオン! 今後の方向性について 14：00～14：10

基調講演 14：10～15：10

講演詳細は P14



講師 湯浅 真奈美氏
ブリティッシュ・カウンシルアーツ部長

大学卒業後、国際産業見本市主催会社の広報部を経て、独立系の映画配給会社の劇場宣伝部に所属。宣伝プロデューサーとして、劇場公開映画の広報宣伝を担当。1995 年、英国の公的な文化交流機関、ブリティッシュ・カウンシルのアーツチームに所属。2005 年より現職。アーツ部門の担当マネージャーとして、日本におけるブリティッシュ・カウンシルのアートプロジェクトを統括。日英両国の文化機関と連携し、文化芸術を通じた日英間の交流プログラムを担当。文化庁文化審議会委員および文化政策部会委員、横浜市創造界隈形成推進委員会など。



会 場 BLACK BOX 2F BLACK HALL
開催日時 2015（平成 27）年 3 月 8 日（日）14：00～17：00
来場者数 120 名



シンポジウム 15：25～17：00

パネリスト 湯浅 真奈美氏
鹿内 博氏（青森市長）
若井 暁氏（マルハニチロ俊武多会囃子方「海鳴」顧問）
立木 祥一郎（アートでオン! 副会長）
大嶋 憲通（アートでオン! 委員）
竹浪 比呂央（アートでオン! 委員）

コーディネーター 嶋中 克之（アートでオン! 会長）



主催：アートでオン！
共催：青森市教育委員会
後援：東奥日報社 / 毎日新聞青森支局 / 朝日新聞青森総局 / 読売新聞青森支局 / 陸奥新報社 / デーリー東北新聞社 / NHK 青森放送局 / 青森放送 / 青森テレビ / 青森朝日放送 / エフエム青森 / 青森ケーブルテレビ



平成27年度アートで音楽のあるまち青森 文化芸術創造活動助成事業

目 的

「アートで音楽のあるまち」づくり推進のため、個人や団体等の文化芸術活動活性化を目的とした支援を行なう。

効 果

審査のポイントとして、「新たな」「先駆的な」「創造的な」事業、という観点をもち、青森市のアート活動を助成という形で支えることで、街への新しい文化発信を試みた。

公開選考会（6/28 開催） 申請件数：15 件 助成件数：5 件
助成総額：1,338,823 円

選定委員

奥脇 嵩大氏（青森県立美術館 美術企画課 学芸員）/ 近藤 由紀氏（国際芸術センター青森 主任学芸員）/ 横山 克広氏（青森市教育委員会事務局 理事）/ 若井 暁氏（マルハニチロ 俊武多会囃子方「海鳴」顧問）/ 嶋中 克之（アートでオン! 会長）/ 大嶋 憲通（アートでオン! 副会長）/ 中村 昇（アートでオン! 委員）/ 三澤 章（アートでオン! 監事）



なべげんわーく合同会社

「渡辺源四郎商店 畑澤聖悟中学生演劇体験ワークショップ」
（6/28・7/20・8/14・8/15・8/16 開催）

【事業の目的】

高校演劇の指導者として全国的に知られ、実際に全国の公共ホール、自治体からの講師の依頼を受けて演劇ワークショップを行っている畑澤聖悟が、地元青森の高校演劇や青森県のパフォーミング・アーツの裾野を広げるために2008年から毎年夏に行っている中学生対象の演劇ワークショップの継続。（※2014年のみ、フェスティバル/トーキョー14関連企画ワークショップを例年の開催と同時期に東京で行ったため休止）

申請金額 / 50 万円 助成金額 / 25 万円



（一社）BLUE ties Impression

「ぶるー nebuta」 （7/31～8/8 開催 ※8/1 除く）

【事業の目的】

本県には日本トップレベルの青森大学、青森山田高校男子新体操部が存在する。青森大学においては、13年間連続で日本一に輝いており、多方面から高い注目を浴びている。また、OBの中には世界一のサーカス集団「シルク・ドゥ・ソレイユ」からキャスティングされ、現在も世界各国で活躍している者もいる。国内では、青森大学・青森山田高校のOBで結成されたアクロバットパフォーマー BLUE TOKYO が活躍している。このように青森で育んだ高い技術を活かした新しい観光コンテンツを創り出す事で、観光客を誘致し、地域活性を目指す事業。

申請金額 / 50 万円 助成金額 / 438,823 円

06 アートでオン! REPORT



青森市民、みんなの文化芸術活動を応援しています！



青森演劇鑑賞協会「還暦の歌」制作実行委員会

「青森演劇鑑賞協会創立60周年記念 演劇『還暦の歌』」
（8/23 開催）

【事業の目的】

青森演劇鑑賞協会は、1955年（昭和30年）に設立し、今年創立60周年の還暦を迎える。青森市民の皆様を支えられて、「この青森で一人でも多くの方々と一緒に素晴らしい舞台に出会いたい」という思いを前進させ、これまで上演した作品は380回を超え、延べ38万人以上の方々が、ボランティアスタッフとして、観客として参加してくださった。創立60周年は、青森市民の皆さんへの感謝の意味も込めて、一人でも多くの方々と共に舞台作品を創り、制作上演をしたいと考えている。

そこで、舞台経験や年齢、性別に関係なく、たくさんの市民の方々が参加できる演劇「還暦の歌」の制作上演することにした。そして、還暦の歌を市民から公募し、これから60歳を迎える、60歳を過ぎた市民への応援歌を作り、感動を分かち、参加者も観客も全てが主役となる舞台制作を行う。

申請金額 / 50 万円 助成金額 / 20 万円



青い森音楽祭実行委員会

「青い森音楽祭2015」 （9/15 開催）

【事業の目的】

「人間形成のうえで小中学校時代の経験が大切である!」という観点からも、市民による文化活動とリわけ子どもたちとプロ演奏家による演奏機会の提供と演奏活動を通じて、次代を担う子どもたちの音楽教育の助成、および地域の音楽文化の発展・振興に寄与することを目的とする。

申請金額 / 41.6 万円 助成金額 / 30 万円



青森ジュニアオーケストラ

「かけよう海峡にハーモニーの架け橋を 青森ジュニアオーケストラ第35回記念定期演奏会」 （11/22 開催）

【事業の目的】

函館ジュニア・ドリーム・オーケストラとの交流活動をとおり、音楽を愛好する心を育むと共に、目標に向かって努力しながら互いを思いやり尊重する心を育て、次代を担う児童・生徒（団員）の健全育成を図る。

申請金額 / 50 万円 助成金額 / 15 万円



ー再びドアを開こうー
新町の旧マクドナルドでのアート展

【A-gain】展 — Let's open the door again —

中心商店街空き店舗を活用した現代アート作品のインスタレーション展

目 的

中心商店街の空き店舗を、アート空間として再び蘇らせることで、街の活性化と新たな視点を創出する。

効 果

青森市の目抜き通りにランドマークの如き存在感を持ちながら10年前に閉店した店舗のドアを再び開け、東京、青森のアーティストがそれぞれの目線によるサイトスペシフィックな展示を行なった。また、青森市主催の市民参加イベント「A-paradise」と連携したことにより、まちなかに多くの人の流れを創出することにも成功。現代アート展をまちなかの空き店舗で開催したことに対する市民・商店街の反響は大きく、単発的のものせず、継続を望む声が多数聞かれました。

商店街の空き店舗を活用し、東京、青森で活躍するアーティストによる、インスタレーション展を開催。同時に、青森市内の中学校、高校の美術部生徒が、展示アーティストの指導のもと作品を制作するワークショップを行いました。

シンボルプロジェクトディレクター 斉藤 雅美 氏

作品展示：2 階

「啼かない鳥」（ナカナイカラス）



山崎 千尋 氏

1990年北海道生まれ。2013年東京芸術大学芸術学部絵画科油画専攻卒業。東京芸術大学大学院美術研究科絵画専攻壁画第1研究室在籍。

電子、身体、建物などあらゆる事物を絵画材料として捉え、時には自ら道具を発明し、それらを利用して平面作品を展開。モチーフとして使用する現代社会における事

件性を孕んだ問題は、いつの間にか消えてしまった、事の“始まりと終わり”を探る手掛かりとして、姿形を細やかに変化させながら登場する。



主催：アートでオン! 協賛：Fukutake Foundation 協力：A-paradise



会 場 青森市新町1丁目8-16 旧マクドナルド青森新町跡地
開催日時 2015（平成27）年9月12日（土）～
23日（水）10：00～17：00

参加アーティスト

山崎 千尋氏（東京芸術大学大学院美術研究科 / 東京都）
豊川 茅氏（イラストレーター / 青森市）

ワークショップ開催日時

2015（平成27）年9月5日（土）10：00～15：00

来場者数：940名 ワークショップ参加者数：20名

ワークショップ

2015年9月5日（土）①10：00～12：00 ②13：00～15：00
約30センチ×30センチの布にイラストを描き、BABYちゃんクッションを制作。

講師 豊川 茅 氏 ①新城中学校 ②青森東高校



作品展示：1 階

「BABY」（ベイビィ）



豊川 茅 氏

1990年青森市生まれ。イラスト&似顔絵描き。現在は廃校となった青森県立青森戸山高校美術科卒業。いつでも「なんとなくハッピー」をテーマに、おもに女の子・カップル・食べ物などをモチーフとしたイラストを描く。各種イベントのフライヤーやホームページなどのイラスト、漫画などを担当。青森市にてのんびりと活動中。



アートでオン! REPORT 07

第4回アートでオン!フォーラム 「～アーツカウンシルプロローグ～」

“みんなが活躍できる社会とは何か”
アートの役割について考える

目 的

青森で「アートで音楽のあるまち」を実現するための課題にはどういったことがあるのか考察するため、全国各地で演劇教育を重視して活動している講師に話を聴く。

効 果

東京と地方の文化格差、それが教育に及び人格形成にまで影響が出ることを踏まえ、地方で暮らす人たちのアート活動の意義を共に考えることができた。

青森におけるアーツカウンシル設立を目指し、今後何が必要で、どう進めるべきかを、平田オリザ氏を始め、多数のゲストや会場の皆さんとともにアーツカウンシル設立のためのプロローグについて考えました。

第1部 アートで音楽のあるまち青森 文化芸術創造活動助成事業 中間報告 18：30～19：25

第2部 講演「新しい広場をつくる」 19：30～20：00



講師 平田オリザ氏
劇作家、演出家

講演詳細はP17

1962年東京生まれ。こまばアゴラ劇場芸術総監督、城崎国際アートセンター芸術監督、劇団「青年団」主宰。東京藝術大学 COI 研究推進機構特任教授、大阪大学コミュニケーションデザイン・センター客員教授、四国学院大学客員教授・学長特別補佐。1995年『東京ノート』で第39回岸田國士戯曲賞受賞。2002年『芸術立国論』（集英社新書）で、AICT 演劇評論家賞受賞。2003年『その河をこえて、五月』（2002年日韓国民交流記念事業）で、第2回朝日舞台芸術賞グランプリ受賞。2006年モンブラン国際文化賞受賞。2011年フランス国文化省より芸術文化勲章シュヴァリエ受勲。その戯曲はフランスを中心に世界各国語に翻訳・出版されている。2002年度以降中学校の国語教科書で、2011年以降は小学校の国語教科書にも平田のワークショップの方法論に基づいた教材が採用され、多くの子どもたちが教室で演劇を創作する体験を行っている。



会 場 新町キューブ 1F グランパレ
開催日時 2015（平成27）年10月31日（土）18：30～21：00
来場者数 110名



第3部 ラウンドテーブル（市長、講師、発表者、委員による討論） 20：05～21：00

メンバー 平田オリザ氏
鹿内博氏（青森市長）
青い森音楽祭実行委員会、
なべげんわーく合同会社、
青森演劇鑑賞協会「還暦の歌」制作実行委員会、
（一社）BLUE ties impression、
青森ジュニアオーケストラの各代表者
アートでオン!委員



主催：アートでオン!
共催：青森市教育委員会
後援：東奥日報社 / 毎日新聞青森支局 / 朝日新聞青森総局 / 読売新聞青森支局 / 陸奥新報社 / デーリー東北新聞社 / NHK 青森放送局 / 青森放送 / 青森テレビ / 青森朝日放送 / エフエム青森 / 青森ケーブルテレビ

平成28年度アートで音楽のあるまち青森 文化芸術創造活動助成事業

今年も青森市民の文化芸術活動を応援!

目 的

「アートで音楽のあるまち」づくり推進のため、個人や団体等の文化芸術活動活性化を目的とした支援を行なう。

効 果

前年に引き続き2回目の助成事業公募となり、バラエティにあふれる事業内容での申請が多くあった。また、前回の不採択だった団体が、さらなる改良案を提示して採択になるケースがいくつかあり、文化振興に対する熱い想いを市民に届ける一助となった。

公開選考会（7/9開催） 申請件数：15件 助成件数：4件
助成総額：1,500,000円

選定委員

奥協 嵩大氏（青森県立美術館 美術企画課 学芸員） / 近藤 由紀氏（国際芸術センター青森 主任学芸員） / 沼田 祐寛氏（丸石沼田商店 常務取締役） / 横山 克広氏（青森市教育委員会事務局 理事） / 嶋中 克之（アートでオン! 会長） / 立木 祥一郎（アートでオン! 副会長） / 中村 昇（アートでオン! 委員） / 張間 陽子（アートでオン! 委員）

学校法人青森田中学園 創立70周年記念イベント実行委員会 「青森中央文化専門学校「DRESSEDUNDRESSED展」事業」 （8/11～8/16開催）

【事業の目的】

青森市出身のファッションデザイナー・北澤武志氏が展開するファッションブランド「DRESSEDUNDRESSED」の展示会を開催。本ブランドが世界へ放つコレクションピースはアートとして造形美の新たな可能性を感じさせる。学校法人青森田中学園創立70周年記念の地域貢献イベントとし、一般向けに無料開放。刻々と変化するファッション業界に於いて活躍する「DRESSEDUNDRESSED」の誘致は、文化芸術創造都市青森の更なる発展および地域活性化を実現する。



申請金額 / 50万円 助成金額 / 25万円

元気町あぶらかわ商店会 「ジャズで町おこし 油川地域活性化事業」 （8/19開催）

【事業の目的】

青森市出身あるいは青森市で活動を行っているジャズプレイヤーの演奏と、油川地域の学校がJAZZを中心にライブパフォーマンスを行い、見る・聴く・食べるの文化交流を行うイベント。
【見る】油川地域の文化・工芸品の展示
【聴く】JAZZライブパフォーマンス
【食べる】地産食材の創作ファーストフード



申請金額 / 50万円 助成金額 / 25万円



特定非営利活動法人あおもり NPO サポートセンター 「中心商店街空き店舗を活用した現代アート展覧会」 （9/10～9/11開催）

【事業の目的】

中心商店街空き店舗において現代アート展覧会を開催することにより、まちなかに新たな人の流れを生み出し、市民が生活の中で文化芸術に触れる機会の創出、文化芸術都市を支える人材の育成、ならびにアートと社会が結びついた魅力あるまちづくりに寄与する。



申請金額 / 50万円 助成金額 / 50万円

なべげんわーく合同会社 「なべげん日曜劇場－青森で創る秋 2016－」 （9/11・10/9・10/10開催）

【事業の目的】

渡辺源四郎商店と主宰・畑澤聖悟は、劇団活動が単に自分たちの表現を観せることにとどまらず、アートを媒介に地域社会が活性化するための起点でありたいと考えている。そのためには、継続して質の高い演劇公演を打ち続けることはもちろんだが、他の視点からも興味を持ってもらい、門戸を広げるということも必要である。そこで、年に2回行なっている通常の畑澤聖悟・演出の渡辺源四郎商店本公演とは異なるアプローチで取り組んできたのが「なべげん日曜劇場」である。三度目となる今回の「なべげん日曜劇場－青森で創る秋 2016－」には二つの新しい挑戦がある。



①国際共同制作作品を青森から発信!

青森から発信する演劇の可能性を広げる国際交流コラボレーションの場として、どのような作品が創れるかという試み。ハンガリーからの演出家ティナ・ロスナー氏と、青森市在住の世界的コンテンポラリーダンスの騎手・長内真理氏を招いて滞在型の共同制作を行う。

②大人向けの演劇ワークショップ付きの公演!

上演を観る演劇体験だけでなく、演じてみる演劇体験を大人に提供する。中学生演劇体験ワークショップで培ってきたノウハウを大人向けに応用する。

申請金額 / 50万円 助成金額 / 50万円

青森市アートで音楽のあるまち“創造の場づくり”支援事業 「～青い森のトポス～」

目 的

青森市で活動する作家・アーティスト・文化団体等は無償で空き店舗を貸し出すことで、中心商店街にアート空間を創出し、賑わいを取り戻すきっかけを作るとともに、市民が活躍できる場とする。

効 果

1ヶ月間、夜店通りの空き店舗（2店舗）を借り上げ、公募などで集まった6組でスケジュールを組み、毎日のように街でアート活動が繰り広げられる場を創り出し、出演者や主催者はもちろん、普段は街中に来ない層も巻き込んだの賑やかな事業となった。

選定委員

奥脇 嵩大氏（青森県立美術館 美術企画課 学芸員）/ 沼田 祐寛氏（丸石沼田商店 常務取締役）/ 若井 暁氏（マルハニチロ俊武多会囃子方「海鳴」顧問）/ 嶋中 克之（アートでオン!会長）/ 大嶋 憲通（アートでオン!副会長）/ 中村 昇（アートでオン!委員）/ 三澤 章（アートでオン!監事）

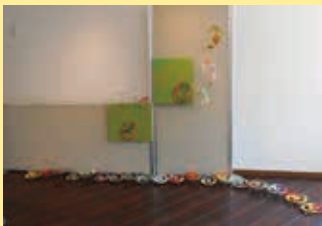
柳谷暁彦作品展

「TRERATO」

9月2日（土）～4日（月）開催 会場：空き店舗 ①

青森市のアーティスト 柳谷暁彦さんによる立体作品の展示。

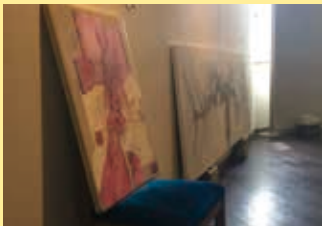
「音楽表現で使われる、トレモロ、ピブラートに触発され、その音の震えと揺さぶりから得られる体験を、カタチあるモノに変化させ、視覚化する試み」（リーフレットより）



木戸永二絵画作品展 & ライブドローイング

9月7日（水）～10日（土）開催 会場：空き店舗 ①

青森市出身の画家 木戸永二さん（明の星短期大学講師）による展示。ドローイング作品を会期中に制作し、その進み具合を、地元商店街の方々も観に来ていました。



展示「What's the NEBUTA ?」

9月7日（水）～14日（水）開催 会場：空き店舗 ②

青森ねぶたのアート性と伝統性を検証。実験的なねぶた・ねぶた作品と、歴代の青森ねぶたの伝統性を考察した研究内容と資料集を展示。（展示担当：工藤友哉）

ワークショップ「ねぶたの模様を彩る～青い祭～」実施（講師：山内勇輝）

9月10日（土）・11日（日）
【対象】中学生・高校生・教育関係者



第5回アートでオン!フォーラム 「～夢が叶えられる街では～」

目 的

青森・函館の映画文化を振り返ることで、“劇場都市”としての青森の可能性と、アートで街おこしをしていくためのヒントを探る。

効 果

幼少期に青森に住んでいた講師の思い出とともに、青森市の映画館文化や映画ロケ地としての記憶を振り返り、函館市で市民が主体で運営している映画祭について話を聴くことで、今後の青森での活動におけるモデルケースとして参考にできた。

第1部では、青森市内の文化芸術創造活動に対して助成を行なった事業（4団体）による報告会が行なわれ、アートで音楽のあるまちづくりに寄与する活動についての発表をしていただきました。第2部では、「～（映画文化をとおして）～青森と函館どっち？」というテーマでトークセッションを行ないました。函館港イルミシオン映画祭の立ち上げに関わったあがた森魚さん、そして青森市のシネマディクト館主である谷田恵一さんをお招きし、青森や函館の映画文化について伺いました。

第3部のミニライブでは、あがた森魚さんが「風立ちぬ」「赤色エレジー」などを歌い、青森市の舞踏家 福士正一さんも登場。アンコールでは会場全体で歌声に包まれ、楽しい時間となりました。

第1部

アートで音楽のあるまち青森 文化芸術創造活動助成事業 報告会

15：00～16：00

第2部 トークセッション

「～（映画文化をとおして）青森と函館どっち？～」

16：00～17：00

出演：あがた 森魚氏 / 谷田 恵一氏
進行：嶋中 克之（アートでオン!会長）

講演詳細は P19



あがた 森魚 氏

'48年北海道生まれ。'72年デビュー曲「赤色エレジー」の大ヒットで一躍時代の寵児に。20世紀の大衆文化を彷彿とさせる幻想的で架空感に満ちた作品世界を音楽、映画を中心に展開。2014年11月『浦島64』2015年7月『浦島65BC』11月『浦島65XX』を連続リリース。全国でライブを展開中。劇場公開作品3本を監督、俳優や執筆などでも活躍中。

谷田 恵一 氏

'61年青森市生まれ。青森市古川夜店通りにあるシネマディクト館主。今年創業62年を迎えた奈良屋劇場三代目興行師。いまや絶滅品種の独立系映画館で自ら映画作品を選び上映している。

“劇場都市”としての青森とその歩みを振り返る

会 場 新町キューブ 1F グランパレ

開催日時 2016（平成28）年10月29日（土）15：00～17：45

来場者数 80名



■第3部 ミニライブ 17：00～17：45

出演：あがた森魚氏 / 福士 正一氏

福士 正一 氏（舞踏）

青森市在住。「オドラデク道路劇場」主宰の舞踏家。あがた森魚の歌と共に、舞踏で今まで幾度もジョイントライブを行っている。



主催：アートでオン！

共催：青森市教育委員会

後援：青森県 / 東奥日報社 / 毎日新聞青森支局 / 朝日新聞青森総局 / 読売新聞青森支局 / 陸奥新報社 / デーリー東北新聞社 / NHK 青森放送局 / 青森放送 / 青森テレビ / 青森朝日放送 / エフエム青森 / 青森ケーブルテレビ



講演詳細

第1回から第5回フォーラムで実施された基調講演、トークセッションの内容をまとめたもの、または、講演をテキストに起こしたのから抜粋してご紹介します。

第1回アートでオン!フォーラム 基調講演 「アートから都市を構想する―創造都市とアーツカウンシルを巡って」

【基調講演】

講師：株式会社ニッセイ基礎研究所
社会研究部主席研究員 / 芸術文化プロジェクト室長

吉本 光宏 氏

創造都市とは何か？

かつて重工業で栄えた欧州の主要都市の多くは、1970～80年代の脱工業化、産業の空洞化によって荒廃していました。そんな中で活力を取り戻した都市を、英国のチャールズ・ランドリーらがリサーチをしたところ、芸術や創造的な活動に力を注いでいることがわかり、それを「創造都市」と名付けたのが始まりです。

例えば鉄鋼・造船で栄えた英国北東部の都市ニューカッスル／ゲーツヘッドは、80年代には失業率15%にまで衰退していましたが、市議会とアーツカウンシルが中心となり、巨大なパブリックアートを設置、世界中から人々が訪れるようになりました。鋼鉄製の巨大な作品は、鉄鋼・造船で培われた技術によって建造が可能だったもので、かつて町の産業や経済を支えた工業技術がアートとして蘇ったことが市民の誇りに繋がり、以降、多様なアートプロジェクトによって都市の活力を取り戻していきました。今ではほとんどの市民が地域の活力にはアートが必要だと考えています。

フランス西部のナント市も、80年代に造船業の撤退で町はすっかり衰退していましたが、90年に文化による再生を公約に掲げた市長が当選し、文化行政を大幅に強化しました。市の予算の15%程を文化に投入し、ピスケット工場を文化施設へ改修したり、トップレベルのアーティスト達の誘致や多様な文化イベントを展開したりするようになりました。その結果、芸術が日常生活に根付き、ナントで生まれたアートを世界に発信することで、今ではフランスで最も住みたい町、有能な人が集まる町として、国際的な競争力のある都市に生まれ変わりました。

他にもオランダのアムステルダム、ドイツのルール地方など芸術や文化をまちづくりの中心に据えている都市は少なくありません。いずれも、文化芸術活動に膨大な予算を投入しています。それらの予算は、文化から直接的に回収することはできませんが、文化への投資は交流人口の増大や創造産業の創出に結びつき、文化以外の領域で大きな経済循環が生まれています。これが創造都市のダイナミズムと言えます。

.....

冬のねぶた音楽祭フォーラム 基調講演 「創造都市の原点『ねぶた』」

【基調講演】

講師：公益社団法人企業メセナ協議会 代表理事専務理事 加藤 種男 氏

みなさんこんにちは、今紹介いただいた加藤です。しばらくお付き合いいただきたいと思います。

（囃子演奏が）すごい迫力で、たしかに6つ、基本的には似ているでしょうけども、ひとつひとつが本当に微妙なところが違っていて、すばらしい囃子を聞かせていただいてありがとうございます。

また、さっき打合せが終わった後で、市長さんストレッチやっけていまして。話をすると聞いていたのに何をやっているのかなと思ったら、こういう仕掛けがあったのかという。大変素晴らしい市長の「跳ねる」を拝見出来てありがとうございます。

今日お話ししたいと思っているのは3つ項目があるのですが、1番初めは、まずねぶたですね。ねぶたに代表される各地にあるお祭りというものが、一体世の中でどういう役割を果たしているか、また、これからさらに価値の



日時：2013 年 11 月 23 日（土・祝）9：45～10：45

会場：BLACKBOX 2F BLACK HALL

アーツカウンシルとは何か？

英国が発祥の地で、世界各国に広がっていますが、一言でいえば、政府や行政機関とは一定の距離を置いて、芸術文化に対する助成を中心に文化政策の執行を担う専門機関のことです。

英国では1946年、第2次世界大戦が終わった直後にアーツカウンシルが生まれ、政府が芸術を支援するという概念が確立されました。初代会長を務めたのは、20世紀を代表する経済学者のケインズで、第2次世界大戦時にナチスドイツが芸術を政治的に利用したことへの反省から、政府と一定の距離を置くことを提唱、アームズ・レンクスの方針が生まれました。同時にケインズは芸術家に対して敬意を払い、アーツカウンシルの仕事は、芸術家を指導したり、検閲したりすることではなく、勇氣と自信とチャンスを彼らに与えることだと訴えました。英国のアーツカウンシルの予算や方針は政権交代で左右されることも多いですが、独立機関として独自の判断に基づいたプログラムを展開しています。

日本では、1990年に誕生した日本芸術文化振興会（英名：ジャパンアーツカウンシル）の芸術文化振興基金において、助成の審査や評価を強化するため、2011年から、助成プログラムの専門家が起用され、本格的なアーツカウンシルとして機能するようになってきています。

地方自治体でも東京都や大阪府・市、沖縄県などでアーツカウンシルが設置されています。横浜市ではアーツコミッションという名称で、創造都市政策を推進するため、「芸術不動産」という事業に取り組んでおり、遊休不動産をアーティストやクリエイターのスタジオとしてマッチングさせることで民設民営の46の芸術活動を支える拠点ができ、300を超えるアーティストやクリエイターが集まるようになりました。

これからのアーツカウンシルは、助成金を出すだけでなく、そのことで地域を芸術で活性化していくという発想が重要になっていくでしょう。

.....

日時：2014 年 3 月 9 日（日）15：00～15：15

会場：青森市文化観光交流施設「ねぶたの家ワ・ラッセ」イベントホール

あるものではないか、そういう話をしたいと思っています。そうした非常に価値のあるお祭りのような、せっかくいい文化があるのに、我々はどうも文化というとなにか高尚なものというか、我々の生活からちょっとかけ離れたものという風に、考えすぎてきたのではないか。どうしてそういうふうになってしまったのか。これが2番目の話です。最後は、もう一度私どもの身近なものとして取り戻して、地域を元気にする。青森市の場合で言うと文化創造都市ということでとられますから、そうした文化創造都市としてどうやって繋げていったら良いかが、3つ目の話となります。

まず祭りですね。ねぶたのことは、みなさんの方がはるかによく御存じですから、よくお分かり頂けると思いますが、今はねぶたも大変、見物客が外からもやって来る、だから観光資源になる。300万人お客さんがいらっしやる。そういう意味で見物ということが非常に大事だと思われるのですが、実は見



物は結果論であって、もともとお祭りは別に見物人をあまり期待していない、どうでもよかったのです。それで、さっきも拝見した、お囃子の6種類が全部違う理由は何か。よそのお祭りはどうでもよくて、同じねぶたと言おうが、ねぶたと言おうが、ともかくうちの祭りだけが大事なので、よその町の祭りは正直言ってどうでもいいんです。自分のところに祭りがあるのに、わざわざよそまで出かけて見に行くなんてばかなことは普通はしなかった。それは全国どこでも基本は同じだったので、祭りが自分のところにある人たちは、よその祭りは見に行かない。自分のところに祭りがあることの意味というのがすごく重要だ。なぜ見に行かないかというと、暇がない。つまり大体同じ時期に同じような祭りが、全国いろいろなところにあり、近隣は大体日程が良く似ているので、見に行かない。あるいは自分のところの祭りを作るのにものすごくエネルギーがいるし、手間暇もかかって、外からみると1日か2日だけの出来ごとのように見えても、本当はそこに至るまでもものすごく準備がある。このねぶたも、作られるまで何ヶ月もかかる、その準備、一年中いろいろそういうことについて考えている人がいるわけで、そういう事を含めて考えると非常にエネルギーがいる。一番重要なポイントは何かということ、全員が作って、全員で楽しむので、見る人はいらない。作って楽しむ、とにかく参加しないと価値がないわけです。だから市長さんストレッチまでして跳ねたわけですね。跳ねないことは面白くない。見ても多少は楽しめるのですが、見るよりは絶対参加したほうがお得、というかそれが圧倒的に祭りというものだったんです。見物人がいなくて全員が作り手、全員が楽しむ、全員が見物人とも言えるのですが、作った人が同時に見物するという形になっている。参加者すべて参加型。そこが非常に重要です。

文化の、実は一番重要なポイントは、本来、みんなで作ってみんなで楽しむ、お祭り型の文化というものでした。元々それしかなかった。でも中にときどき上手な人がいるわけです。今日拝見していても、すごく上手い人と、ちょっと上手い人とがいるわけですね。だから上手な人が出てくる。さらに上を極めたい、という事があってどんどんエキスパートになりやすい。もちろんねぶたは、理屈上は誰でも造れるはずだが、実際にあれだけのものを設計して造るには相当の専門性が必要になってくる。そうやって専門性が必要とされることになり、さらに専門家に任せると上手くいくので、一般の人が自ら作るよりは、誰か専門家に頼もうという方向へどんどん移行していく。それが今日、世の中に生み出されているいわゆる芸術です。

ここにも書いてありますが「アートでオン!」と言ったときに、アートとか音楽とかそういうものは、専門家が作って、みんなが見物人、観覧者としてそれを楽しむという構造を普通だと思うようになってしまったのです。そうすると良い人ばかりで作っているのらないのですが、世の中には悪い人がいる。ここで金儲けする人がでてきて、耳が聞こえないことにして誰かに作ってもらう。という人も現れるわけで、まふと我々が騙された理由は何かということ、クラシック音楽は高尚なものだ、素人にはできない、絶対専門家にしかできない。専門家が作ったと言われてしまうと、批評、批判、反論できない。何かすごいものに違いないと思われている。本当は聞いて、面白いものかどうか、自分の耳で判断すればいいのですが、それができなくなっている。そこにまふと付け入られて、我々はすっかり騙された。あんなことはしょっちゅうあるわけではありませんが、いずれにしても専門家が作ってすごく良いよと言われると、何も面白くもなく、わけ分からんと思って受け入れてしまう。

この県立美術館にでっかい犬がいます。でね、何が面白いのかと思う人も中にはいると思うんだけど言えないわけです。世界的にすごく活躍しているアーティストが造ったと言われちゃったものだから、これはアートだから、我々素人が批判することはできないですね。個人的には、あの犬いいなと思ってますが、中にはあんなものただの犬じゃないか、あんなこと自分にもできるよ、と思っている人がいっぱいいるんですが、そう言えないわけです。そこに何か、我々がもともと持っていたお祭りのように、みんなで作ってみんなで楽しむという形じゃない、誰か少数の専門家が作ってそれを我々がみんなで見るとか、鑑賞するという構造になっている。その専門家という人がなにか偉い人になっている。偉い所に一人いてそれを押し頂いて観るという構造に来てしまった。その有り様を変えたほうがいいと思う。

しかしなぜ、みんなで作って、みんなで楽しむやり方がいいと思うにもかかわらず、だんだん専門家のやっていることが素晴らしいくて、我々一般の人がやっていることが大したことないというふうに思われるようになってきたのか。これがひとつの謎なわけです。そこを一回考えないと、回復できない。どうしてこうなったか。

私が学生時代、今から50年近く昔、この辺りを歩いていた。農業調査をした。



西津軽郡深浦町の大童子川の上流にある、岩坂という集落出身の友達の家が転がり込んで、そこから津軽一円、下北も含めていろんな調査をさせてもらった。青森の文化的な資源として非常に重要だと言われているのが津軽三味線ですね。津軽三味線は今では全国的にも有名で流行っています。正直いって私が学生の頃この津軽の地元で歩いていて聞いたことがない。もちろん竹山さんはいらしたけれども、あの人は唯一の例外として、誰も表に出したくない、むしろ隠しておきたいような芸能として生きてきた。つまり地元にある素晴らしいものが価値はないと思われて、なるべく表に出さないようにしていた。ところが成田雲竹先生とか、その他いろんな方の目にとまり、どんどん世間が評価するようになって、初めて外から言われて、津軽三味線すごいじゃないか、というふうになって今や地元の人もすごいことかもしれないと思うようになった。これと全く違って、実は何がすごいと思われて来たかとうと、西洋のものです。とにかくヨーロッパから来たもの、海外から来た文化はすごいと思ってきた。

だからいまだに文化ということ、アートや音楽。音楽というتماずクラシック音楽、そういうものを思い浮かべて、あれが芸術である、そうでない津軽三味線はもともと芸術ではなかったのだけど、最近は上手な人もでてきたから、芸術に昇格したというような評価をされてきた。こんな感じを持っているわけです。

つまり、外からきたもの、中央の東京で評価されたものは凄いらしい、地方の文化はダメなんだ、これが繰り返されてきた。地元の言葉もそうですね。方言もなるべく使わな。今はまたそれがようやくやく方言の価値も思い出されるようになってきた。外から来たもの、中央からきたものは価値が高くて、地元のもの、地域の文化というものがダメなんだと思われてきたものが、今ようやく少し方向が変わりつつある時代なのかなと思います。そのところを我々は克服していかなければならない。

我々も年寄りなのでこれから年寄り文化だと思っているのですが、一方で我々が受けてきた教育はそういう西洋のもの、ハイカルチャー、高級文化とかそういうものだけが文化だと思われてきた。小学校から音楽と言ったら学校ではクラシック音楽しか習わないわけだし。そこで、もっと昔に戻って、はたして我々は先祖からどういうものを受け継いできたのか考えてみたい。ねぶたもすでに毎日、日進月歩というか変化してきている。伝統というものはいつでもリノベーションしている。そもそもこんな大きなものを作るようになったのも、みなさんご存じのとおり、そんなに昔ではない。そういう意味ではお祭りも変化してくるわけです。いずれにしてもそういう思い込みを早く払拭して、もうひとつ新しい道に進んでいくべきではないか。もっと地域に根差した祭りのようなもの、様々な文化をこれから地元で掘り起こして、それが凄いいと言っていく必要があるのではないかと思います。

その上で厄介な問題があります。1つはクールジャパンという、最近、文化が経済に役立つから、価値があるというふうにいるわけです。マンガとかアニメとか映画とか、経済的価値を生まないと価値じゃない。観光に役立つ、もちろん結果的に役に立つのですが、そのことを一番大事に考えたら、たぶん経済的にも役立たないのではないのかなということを今思っています。そうではなくて、それぞれの地域や生活に根差した文化がなぜ重要かというと、まず年寄りを元気にするというのも大事なことです。これからますます高齢者の表現活動とか高齢者の参加のシステムが重要です。そうした参加のシステムみたいなことを考えていくときに、本当に地域に根差した文化というものが非常に大事になってくる。それは経済価値があるうがなからうが、そんなことでもいいわけです。もっとももっと多様な様々な文化を発掘していくことによって、お年寄りが元氣になれば、結果的に行政も助かるのです。義務的経費は節減できるわけです。福祉だとか高齢者のいろいろな対策費が少なくて済むし、若い方々にとっても非常にプラスになる。そういう状況をこれから作っていく必要がある。だから若者の文化も非常にいいのですが、同時に年寄り向け文化をどうやってもう一度考えていくか、ということが非常に大事です。

様々な領域の、こんなものに何の価値があるのかと思われるようなものこそ、むしろこれからは非常に大きな価値を持ってくる。だからクールジャパンじゃなくてホット青森というのをこれらのキャッチコピーに変えたほうがいいと思います。だいたいオンですから、オンというのは暖かいだから。だからもう一度、地域に根差した文化を色々発掘して、眠っている物を資源として活用して。経済にすぐ結び付くと考えずに。そんなものは結果であって、毎日我々自身が楽しめる、楽しんでいく、元気で生活していける、そのために文化は非常に重要な役割を果たすんだ、ということです。ホット青森を提唱して、とりあえずお話とさせていただきます。



第3回アートでオン!フォーラム 基調講演 「カルチュラル・オリンピアド 青森におけるアート政策の可能性」

【基調講演】

講師：ブリティッシュ・カOUNシル アーツ部長 湯浅 真奈美 氏

みなさまこんにちはブリティッシュ・カOUNシルの湯浅と申します。本日はどうぞよろしくお願ひ致します。

今日は、英国では文化が都市の中でどのような位置づけにあって、2012年オリンピックの前後にかけてどのような変化があったか、それを踏まえ、青森型の文化を通した街づくりとはどういったものかということをお皆さんと一緒に話したいと思ひます。

私たちの組織であるブリティッシュ・カOUNシルは、世界の100カ国以上の地域に拠点があり、主に英国とそのほかの国々の方々との経験やアイディアなどを共有しながら、信頼関係を作っていくことで未来へ進んでいく、というのが組織のヴィジョンです。活動分野としては教育、英語、そして、私が担当させていただいているのが、文化芸術アートになります。

文化政策・文化振興の中、英国がオリンピックをどのように位置づけて、どういったヴィジョンを持って臨んだのか。

アーツカOUNシルは、英国ではもう70年近く前からあり、2010年から2020年までの戦略的ヴィジョン「Great art and culture for everyone=優れた文化芸術をすべての人に」が根幹にあります。これを達成するために、5つの目標、ゴールというのを掲げています。

- 1 番目に、素晴らしい芸術活動というものを行わなければいけない
- 2 番目に、それがすべての人に届くということを担保しなければいけない
- 3 番目に、文化芸術分野は力強く、持続可能でなければいけない
- 4 番目に、その文化芸術分野で働く人材は多様性があり、必要なスキル・技能をもっていること
- 5 番目に、若い子どもたち、次の世代の人たちにインスピレーションを与えていく

この2010年は政権交代があり、国が大きく変わっていった時期で、英国は非常に経済的に厳しい状態があり、文化の助成金も減っていった時期でした。公的な助成金に頼っている文化が伸びていけないので、それを活性化して、力強くしていくために、こういったヴィジョンが考えられ、素晴らしいアート文化芸術が、すべての人にいきわたるように、いろいろな政策がとられています。

特に最近、公的な助成を文化に使うことを、市民または文化ではない政策分野の省庁へも含めてきちんと説明する必要があり、加えて文化芸術というものが文化的価値だけではなくて、社会に対する価値や教育、経済、人の健康、幸せ、そういったものに非常に大きな効果があるということを、英国の中で、はっきりとした言葉で説明していくことが求められています。

（静止画を示し）これはアーツカOUNシルイングランドの場合で、経済的、健康、教育的価値などのデータを集めています。英国も、日本に次いで高齢化が進む中で、文化芸術で何ができるのかと、色々な施策が始まってきています。特にロンドン以外の地方都市での高齢化が非常に進んでいる中で、その地域の美術館が市民にどういった形で役割を果たすのか、展覧会に来られる人はいいけれども、来られない人たちの孤立というのが大きな問題であり、その地域の来られない方々にどういった風形でアプローチしていくのか。

いくつかプログラムがあります。たとえばリパールの美術館では持っているコレクションからメモリスーツケースというレプリカを作り、とくに認知症のケアホームの方々役に立っていただくような形で使っています。同美術館では、非常に大きなプロジェクトで、文化予算ではなく保健省の大きな予算がついたプロジェクト=House of Memoriesというものがあります。ケアホームのスタッフは、日々辛い過酷な状況の中で、非常に孤立してサポートが必要だと社会的問題となっています。その方々に美術館が自分たちのコレクションをどういった風に活用してもらい、どういった形で高齢の方々のお役にもたてるのかというトレーニングプログラムをしています。

日時：2015年3月8日（日）14：10～15：10

会場：BLACKBOX 2F BLACK HALL

2020年オリンピックに向けて、既にいろいろなプランニングが始まっています。英国の経験者が言うのは、オリンピックというのは「一生に一回の一大チャンス」であるということをお言っています。世界中の目がロンドンだけではなく英国に向く1年間であり、そこで世界中のアスリートが来るだけではなく、世界のメディアがやってきて、この期間、どの国の新聞やテレビでも表紙の一面。これをどういった風に捉えて向かっていったか。文化芸術の分野で言ひますと、予算も減って厳しい中、ここを大きなチャンスと捉えて、この先に何を残していくかというプランニングがなされました。

イギリスのオリンピックのヴィジョンはGames for EveryoneとInspire Generation。英国民だけではなく全ての人のための五輪大会、次の世代の人たちにインスピレーションを与えていくというヴィジョンを抱えての大会運営、ボランティアの参画、教育のプログラムなどが、文化プログラムへも繋がってきています。

イギリスのオリンピック後の特徴として、Legacy Gamesということをお言われています。ここでのレガシーとは、オリンピック開催後に、長きにわたって残る社会のポジティブな変化のことです。ロンドンのオリンピックにあたって、英国政府・組織委員会がいくつか目標を掲げています。その中には、オリンピックを契機に、経済、雇用を拡大し観光を伸ばすということが挙げられています。今、日本も2020年のオリンピックに向けて観光客の数も増やそうとしており、アプローチが似ているところがあるのではと思ひます。さらに、オリンピックはスポーツの祭典であるので、将来のスポーツ選手を育成したり、英国全体のスポーツ人口を増やしていくこと、そして社会的な活動として地域の繋がりを作っていくとか、市民の参画を増やし、社会の枠組み全体を変えていくことが掲げられました。

また、パラリンピックもあることから障害がある方々に対する市民の見方、社会の仕組みを変えていくということも目指されました。オリンピックのスタジアムが出来るロンドンの東側（移民の方が多い経済的にも貧困層が多い地域）にオリンピックパークを作っています。そこで、大会後、東ロンドンが経済的にも発展し、コミュニティのつながりが強くなるということも目指されました。

これが文化の中でどうということなのか。オリンピック憲章には「スポーツを文化や教育と融合する」とあり、英国は招致の段階から大きくスポーツの祭典であるだけではなく、文化面でも大きく伸ばしていこう、というような取り組みをしていました。その中で、Inspire GenerationとかGames for Everyoneの大きなヴィジョンがあって、経済そして国を成長させていくこと。文化としてどういったヴィジョンを掲げていたか。ひとつスローガンで言っているのが、Once in a lifetime＝「一生に一回」。これはアスリートの方々「本当に一生に一度の素晴らしい成果をオリンピックで魅せよう」ということで皆さん努力をするわけです。

オリンピックを利用し、文化はどういったヴィジョンを立てたか。

- ・英国と創造性を称え、世界中の人たちと分かち合う。
- ・発信を一方向的にするのではなく、一緒に参加してもらい、若い人たち子ども達にインスピレーションを与えながら、文化芸術に対する市民の参加の機会を増やし創造性を育成していく。
- ・あわせて観客を拡大したり、地域を再生したり、文化、観光を伸ばしていく。

オリンピックを契機に、こういったものを後に残していくということだ。それが先ほどのGreat art for everyoneということにそのまま重なり、更にそれを加速していくという考え方だ。

オリンピック全体で、具体的にどのような目標を出したか。

- ・大都市圏に住んでいない人にも、文化芸術に触れる機会を作って観客層を拡大していく。
- ・文化芸術で働く人材の育成をし、雇用を増やしていく。

- ・デジタル革新について文化芸術だけが時代遅れにならないようイノベーションを出していく。
- ・美術館や劇場の中だけでなく都市のあらゆる公的なスペースで新しい活用の仕方をお考えていく。
- ・文化芸術が環境や健康福祉にどんな影響があるかということを検証する。
- ・新しいコラボレーションを行なう。
- ・次の世代の人たちに、オリンピックを通して学習の機会を出していく、など。

設定した目標を達成するために、どのようなプログラムを行なったか。

- ・英国の文化プログラムの特徴 1つ目＝「全国展開」

ロンドンだけではなく英国全土、隅から隅まで非常に大きなプログラムが行なわれました。多くのボランティアの方が参加をしています。このオリンピックが2012年で、その後、ロンドンデリーで英国の文化首都というプログラムを2013年から進めており、そこで大きな文化の祭典が行なわれています。また、スコットランドのグラスゴーで2014年にスポーツ大会があったり、ヨークシャーという北部の街で、ツールド・フランスのスタートの誘致をしました。その誘致をするにあたって、大きな文化プログラムを併せて行なうということで立候補しています。オリンピック2012年を経験したことによって、ロンドンだけでなく英国の地方都市でも、文化の力というのが市民・行政を含めて認識が高まり、私達の街でも何かが出来るんだ、変わっていくんだと、自信がついたとされています。

例1：英国では非常に素晴らしい風景や土地があるが、端の方の、人がなかなか行かない所に、大きなアーティストと一緒にアート作品のコミッションをしていくことで、文化を通して魅力を作っていた。オリンピックの文化プログラムチームと、地方の自治体と組織委員会が全て一つのチームとなり実現。世界中のメディアがオリンピックに来て、開会式の前に到着してやるのがなかった時にそのまま放っておくと、「そこが出来ていない」「あそこが汚い」と放送しがちなのを、バスでロンドンから英国の端の方のプログラムへ連れていったり、官公庁と文化関係者が連携をしてプロモーションを組んだり、一つのチームとして、たくさんの市民と一緒に、この期間をたえながらメディアにも対応していった。トラファルガースクエアでの「ビッグダンス」など。

全国展開は、ロンドンだけではなく、イングランド中部のパーミンガムやコヴェントリー市を含んでいるウエスト・ミッドランズという地域などでも行なわれました。ロンドン以外の地域は、経済的にも失業率が高く人口が流失したりと課題がありますが、ここもオリンピックの文化プログラムに向けて行政と企業関係者・観光関係も含めて、非常に大きなパートナーシップを組んでプログラムを作り、この地域では若い人達、市民のダンスを使った参加プログラムが行なわれました。

- ・英国文化プログラムの特徴 2つ目＝「市民参加 Participation」
アーツカOUNシルのヴィジョン、Everyone＝全ての人。オリンピック後の特徴としては、ホスト国である英国でも実際にオリンピックを体験できる人（テレビで見る以外にスタジアムに行って観ることが出来る人）は本当に一部しかいません。あとは英国民全体、ロンドン以外の人達が、オリンピックをバックアップしたとか、オリンピックに参加することを実感できるとすれば、文化プログラムにしかなかったと思ひます。いろいろな文化のプログラムをほとんど無料で行ない、そこに市民の方たちが主体的に参加し、それがロンドンだけではなく英国の端から端までで行なわれています。その結果として、芸術の観客層の拡大を狙っていきました。

例1：文化プログラムディレクターが「いつもの事ではなく、ここでしか出来ない一生に一度の夢は何か」をアーティストに尋ねたところ、Jeremy Deller（ターナー賞受賞アーティスト）が「ぼくの夢は実物大のストーンヘンジを作って、トランボリンみたいなものを作って英国中をツアーしたいんだ」と言い、これを実現した。

例2：文化芸術分野で働く人材を雇用・育成をしていくために、文化芸術団体でインターンシップといった形で職業の訓練が出来るような機会を多く作った。ロンドン市長のヴィジョンで、2012年までに10万件のCreativeな

仕事体験ができるポストを作るヴィジョンをオリンピック前に出していた。

例3：英国は移民の方や文化背景の方、障害がある方々を含めた非常に多様な人たちがいるということをお担保していく・享受できる社会を作っていくことを目標にした。英国だけでなく、オリンピック全参加国のアーティストがプログラムに参加し、特に障害のあるプロフェッショナルなアーティストが活躍できる場を作っていくという大きなプログラムUnlimitedがあった。障害のあるアーティストも無いアーティストも等しく区別なくこの大きな祭典に参加をしていった。

- ・英国の文化プログラムの特徴 3つ目＝「イノベーション」
この機を通して大きなイノベーション、革新的なことを業界全体で成長させていくこと、街の中で大きなプログラムも行なわれました。

例1：「ピカデリーサーカスサーカス」というプロジェクトでは、ロンドンの中心部の街中で、突然サーカスアーティストがパフォーマンスを行なった。これをするために、ロンドン市の文化部長を中心に2年間いろいろなところをお説得。予算のない中、オリンピック時にロンドン市中にフラッグ（旗）を立てる観光の宣伝予算があったのを、その部署へ行って「それよりもアーティストの力を借りて、このプログラムをやって市民が参加する方が広報的に意義があるよ」と説得。参加したみなさんのスマートフォンによってソーシャルメディアを通じて世界中に流れていき、これが非常に広告価値も高かった。

なによりも、市民の方々にとって突然ものすごいことが起きるわけだ。「これが出来るロンドンってすごいよね。」というわくわくした感じと、それまで知らなかった人たちが地下鉄で帰っていく時に、知らない人同士が綿毛もじゃもじゃになりながら話している。オリンピックへ向かっていく中での興奮、市民参画と都市に対する自信がついたと言っています。

例2：ロンドンの市役所で、アーティストがパフォーマンス。普段は劇場にあるものがアーティストの力を借りて都市に新しいイメージをつけていき、その新しい面を世界の観客に対しても見てもらうための公共スペースでのプロジェクトというものが多くあった。特にロンドン・英国＝雨がほとんど降りして少し古いイメージがありましたが、ロンドン市長のヴィジョンの中で「オリンピックを契機に、今の社会の中にふさわしい現代的な英国の側面を出していきたい」と。こういったアーティストの作り上げていったプロジェクトがあった。

例3：Martin Creedというアーティストが「オープニングの開会式の前に、英国中の鐘を皆で鳴らそう」というプロジェクトを行なった。教会がないところは自転車の呼び鈴でもなんでもいいから、鐘を何日の何時何分に鳴らしましょうという大きな市民参加型プロジェクト。ビッグベンの鐘を、決まった時間と違う時間に鳴らすということは、これまで何年も行なわれていなかった。こういった「Once in a lifetime＝一生に一回のこと」をお交渉しながら実現していった。

（映像を流しながら）都市のこういった公的なスペースでプロジェクトが行なわれました。またその建物を使った大きな新作をやったり。これは、ヘリコプターの中で楽器を弾いていましたが、ほぼ上映が不可能と言われているカールハインツ・シュトックハウゼンのオペラがありまして、4機のヘリコプターを使って弦楽四重奏のユニットをそれぞれ乗せて街の中でプログラムを行いました。このプログラムに参加した人たちは290万人。若い人の割合が非常に高く、素晴らしいのがロンドンではない地方都市でありながら、ワールドプレミアの新作をコミッションしたり、UKプレミアもあって、地域外からの参加者や観客が多く、それに伴う観光収入など経済効果があったと言われています。その他ボランティア、スポーツも含めて多くの市民が参加し、新規の雇用が130万人ありました。多いか少ないか考えた時に、文化の中で雇用やポストが生まれたことが、非常に大きなことだったと思ひます。その中で、これを実現するために地域間で新しいパートナーシップが出来上がったということも意義のあることでした。

オリンピックの文化プログラムの窓口を担当していた方が忘れられないと言っていたのは、あれだけの街のレベル・スケールでリハーサルをしなけれ

ばならない中、街の上にヘリコプターが4機飛んでいて、そこに警察の方がSNSで「皆さん心配しないでください。これはアートプロジェクトのリハーサルです。」とツイートし、警察までもが文化プログラムをする協力者として市民に対応したことが成功の証しだと言っていました。

英国でオリンピックがあるということを、海外へ広報していく時に行なわれた取り組み

オリンピックにあわせ、英国政府ではあらゆる分野で海外の国々との関係を作っていこうと、大規模なキャンペーン＝「GREAT」を行ないました。ビジネス、教育、文化そのほかあらゆる面で英国と海外を繋いでいくといった大きなプロジェクトです。特徴は、文化を含めて教育、起業、経済、ビジネスあらゆる省庁が連携して行ないました。当初は2009年から2012年までに終わる予定のプロジェクトだったのですが、非常に効果が高く今も続いています。その中で残った一つとしては、省庁間連携という縦割りになりがちなものを横にも繋がったとも言われていました。

巨額な税金を投入されたオリンピックという一大事業がどうだったか。

2012年の後から毎年いろいろなレポートが出ており、政府主導のレポートは2013年、2014年と一年毎に出ていました。当初設定したいろいろな目標の中でどこまで変化が起きているか、例えばコミュニティーの繋がりが強まるとか、経済効果というものはすぐ出るものではなく、長期的でないとかわからないものもあり、それをモニターしながら大きくレポートが出ました。

昨年出たレポートの中では、経済効果が非常に高かった、英国のビジネスの伸びが高く、当初4年間で達成しようとしていた目的を2年で達成したと発表されています。併せて、2012年のオリンピック後にブラジルのリオでサッカーのワールドカップがあって、2016年にリオのオリンピックがありますけれども、そこに向けて2012年を経験した英国企業のビジネス契約をとっていくといういろいろな後押しが順調にあり、観光客の数も非常に伸びています。オリンピック直後から若干落ちましたがそれは予想されていたことで、その後にかなり伸びています。これは英国へのイメージが上がったのと、オリンピック効果が高かったこと、街のインフラが上がったことが考えられます。2013年には、ロンドンが世界で一番観光客が多い土地となりました。それまではパリが多かったのですが、2012年には「ソフトパワー」という文化的なランキングでイギリスが1位になりました。日本の森記念財団の「世界の都市ランキング」では、2012年の後にはロンドンが1位になり翌年も続きました。これがオリンピックの時だけ盛り上がってストンと落ちてしまうのではなく、その先どういう風に成長していくのか、どういう風にインフラを残していかなければならないのかがLegacyだと思うので、それを目標に目指して作ったオリンピックとしては、なかなかいい成果が出ているのではないかと考えています。

今、政府ではロンドンだけでなく、ロンドン以外の街の活性化・観光促進に力を入れている中でオリンピックというのは非常に効果があったと思います。英国政府が2009年位に決めたものですが、「欧州文化首都」というプログラム＝欧州の中でいろいろな都市を文化首都に選んで都市を盛り立てていく、という仕組みがあります。英国政府が英国の文化首都、City of Culture ということをやろうと決め、第1回は2013年にロンドンデリーが立候補をして行ないました。その次が2017年になります。2013年に、英国内の都市に立候補をお願いしたところ、いろいろな都市がオリンピックを経験した後で、文化の力を各都市が実感しており、たくさん手が上がった中で決定したのがハルという街です。

ハルという街を皆さん聞いたことがありますか。人口は25万人程度で、青森市より少ない街です。ハルに決定した時の新聞記事は、英国内でも「ハルってどこだか知らないよね」「北の方のどっか」という感じです。就業・就職していない人が多く失業率が高い。将来に対する市民の希望が少なく、教育も都市に比べて平均も低い。ネット環境も非常に悪く、観光客にいたってはフェリーターミナルはあるが人が通り過ぎていくという課題が山積みするハルの立候補。これを2017年の文化を使って、ハルを一新するトランスフォーメーションを起こすということで立候補をしました。今、見えている映像は、立候補の過程の中で作ったものです。映像を見ていただくと街がちょっとまだ荒んでいるのがわかりますが、2013年（この年に2017年開催を決定）にハルが文化首都に決まった後から、変化が起きています。ハル発、英国全土で2017年文化が盛り上がっています。いろいろなところ

から大きなプロジェクトをするコミットメントがあることを、最初は市民も信じてなかったんですね。誰も賛成していなかったのですが、今は8割から9割の市民がこれを是非やって欲しいと変わってきています。既に広告効果も高く、ロンドンオリンピックの開会式を仕切った方がハルのディレクターになったり、ロンドンからディレクターの方々かなり移ってハル市民となっています。あと2年ですが「ハルから英国の未来を作っていこう」と。2017年に向けて注目して見て下さい。若い人達が将来のヴィジョンをもって暮らせる都市にしていこうとする大切さを。

英国のオリンピックの前、開催中、今の動きというものをいろいろお話しましたが、英国の文化プログラムで、オリンピック全体を体験した人が必ず言うのはパートナーシップが非常に大きいと。これはいろいろなレポートが出ていて、経済効果だとか、観光客の数などについて書かれていますが、何よりも代えがたいのがオリンピックを経験することによって「新しいパートナーシップを築いた」ということを言っていました。

例えば、ロンドンの文化部長、文化プログラム関連の方、国の方と、普段だとなかなか話をしていなかったのが電話やメール一本でお話が出来るようになった。文化と観光、文化と経済、文化と地方行政間に、今まで垣根があったところが、一つのチームになったことによって、色々なネットワークが出来てきた、企業との関係も高まったというのは「何事にも代えがたい財産」ということを言っていました。おそらくそれがLegacyの一つだと思えます。英国でオリンピックに関わった皆さんが言うには、オールUK＝一つのチームとして、1個の大きなフェスティバル・1個のヴィジョンを作ってやったというところが大きいです。そして英国全土で、スポーツの大会も文化も1個のブランドで1つのストーリーを作っている。このオリンピックで一番大事なことは、英国のストーリーを海外の方、世界の方に伝えていく大きな機会になるということです。

日本においても、多様性のある日本文化～日本の都市の中で、どういうヴィジョンを描いていって、世界の方たちにどう伝えていくのかというのは、これからの作業になっていくと思います。英国ではそれぞれの地域毎の課題や戦略がある中で、一つのチームであったことが良かった。そして明確なヴィジョンとLegacyをプランにしながらやっていったことも。その他、あらゆるプロジェクトについても交渉していましたが、文化芸術の中でこれだけの規模のものをやる時に説得が出来る人材、文化以外の警察関係者とか福祉の関係者、行政の関係者、観光の関係者と話が出来る、説得が出来る人材というのがすごく必要になってくると思います。日本も2020年の先を描いた中で2015・16・17から、現場でやっている方々が更に大きな夢を見れるように育成していくことが大事なのかなと思いました。あと文化プログラム経験者から、英国の場合、高いヴィジョンを掲げたOnce in a lifetimeであり、あの年はその結果がそこそこでは許されなかった。アーティストに対して、市民に対して一つバーが上がったものは下げづらくなってくことで、英国の文化全体を上げていく、いい後押しにもなったということも言っていました。とはいえ、英国も実はそう簡単に実施できた訳ではなく、やりながら試行錯誤の日々だったようで、いま出来る事ならやり直したい、新しくやるならこういうやり方があるんじゃないかとか言っています。成功と失敗があった中で、これから2020年に向けて、こんなやり方も良かったんじゃないかと、もっともっとシェアしていきたいということも言っていました。ブリティッシュ・カウンシルとしても日本の皆さんと、英国の、例えばハルだったり、色々な都市の方と繋いでいくようなことが出来ればと思っています。ちょっと時間が長くなりましたが、最後に映像をご覧いただいて終わろうかと思います。

（映像投影）

これは聖火リレーの映像ですが、英国の聖火リレーは英国全体の9割の人が1時間以内で行けるところをルートとして選んであります。イギリスの端、東の端から大きく回っていく中で、市民のワクワクが高まっていったと言われ、この聖火リレーと文化プログラムが密接に関係していたようです。このワクワクが英国全土に回っていったのがオリンピックだったということでしたので、2020年のオリンピックは東京だけのものではないと思います。この市民参画というのが非常に大きかったというのが、この映像を見てみわかると思います。

今日はありがとうございました。

第4回アートでオン!フォーラム 講演「新しい広場をつくる」

【講演】

講師：劇作家・演出家 平田オリザ氏

どうも、こんばんは、平田です。

知った顔が沢山いまして、青森市との関係は亡くなられた牧良介さんとのお付き合いが始まってからなので、ちょうど今年で25年、四半世紀になるくらい沢山寄らせていただいています。先月は弘前大学で3日間集中講義をしてまいりました。また、毎年八戸東高校でも、授業をしております。

今日はですね。「新しい広場をつくる」話をするのですが、30分しかありませんので、新しい広場をつくるという題名の本が岩波書店からでますので、そちらを買って頂くといいかになって思ってるんですけど。それでその本に理論的なことも書いていますが、理論的なことを言い始めると時間がかかるので、その本に書いてない話をします。やはり今日はアートに関係のあるみなさんがおいでになってくれて。みなさんはですね、アート大事だ、アートのいいよね、子どものころからそういうに触れさせるのが大事だよね、というのを重々わかっていきますよね。ただ、ここで内輪で盛り上がっているだけではダメなわけですよ。ですからアートは大事だけれども、今、青森市も予算厳しいでしょうから、本当に大事なのかと、そういうことを考えている人たちにどうすれば説得できるかっていう話をしていきたい。

普段からこういう文化政策とか文化情勢に関する講演会が多いんですけども、昨年の秋ぐらいから今年の春、夏ぐらいまで、非常に自治体の県知事さんとか市長さんからしょっちゅう呼ばれる。なんか話聞かせてくれ、ちょっと時間とってくれとの相談が急に増えました。それは地方創生です。政府が地方創生の予算を付けるので、なんかアイディアないか。人口減少に対してなんかアイディアないか。人口減少問題をですね。劇作家に聞くようになるとこの国も終わりだなと思うんですけど。

僕が良く説明をしてきたんですけど、スキー人口はですね。この20年で半分以下になってます。スノボ足してもですね。スキー人口は1/3以下なんです。スノボ足しても半分以下です。青森県もスキー場を抱えていますから、大変深刻な問題になっているんですけど。なんでスキー人口が減ったのか、それはですね。若者人口の減少があげられます。ただ若者人口が減った、減ったといっても2割しか減っていない、2割って言っても1000万減ったわけですから、大変ですけど、29歳以下の人口が20年間で1000万人減っているけど、そうはいっても2割しか減っていない、スキー人口は半減しました。なぜかというと趣味の多様化とか、あるいは若い人が根性がないので寒いのを嫌がる。いろんな理由があります。

どんな観光学者、社会学者、統計学者でも、みんなおっしゃるのは「若者人口が減ったからスキー人口が減ったんだ。」でも劇作家はそうは考えないです。「若者人口が減ったからスキー人口が減ったじゃないんです。」「スキー人口が減ったから若者人口が減ったんです。」大事な点なのでもう一回言いますよ。「スキー人口が減ったから若者人口が減ったんです。」90年代半ばまで、スキーは20代男子が女性を一泊旅行に誘うもっとも合理的な手段でした。これが減ったらどんだん人口は減るでしょ。いつ会うんですか。

もちろん、スキーは象徴的なものなんですけど、テニスの人口も、海水浴場の人口も減っているんです。たとえば今日はまちづくりの話になると思うんですけど、街の中に古本屋とかジャズ喫茶とかライブハウスとか、そういう若者たちの出会いの場、居場所を一切奪っておいて、少子化だ、人口減少だといって、行政が慌てて慣れない婚活パーティをしているのが今の状況です。

要するに、アートとか文化というのは人間の心を活性化して、それだけではなく男女を会わせたりとか、なんか恋愛に走らせたりとか、間違いをおかさせたりとか、そういう役割をずっと果たしてきたわけですよね。そういうもの奪っておいて人口減少だ、大変だといっても解決にならないわけです。

ご存知のように、人口減少対策、都市の課題はライフワークバランスですね。たとえば待機児童解消とかが問題になるわけです。それは霞が関の目線です。待機児童、確かに深刻です。しかし、待機児童を抱えている自治体は200、多く見積もっても300に過ぎない。残りの1300の自治体は待機児童を抱えてない。どちらかという児童欲しいほうでしょ。要するに東京の考えている対策と、地方の問題は違うわけですね。地方は非婚化晩婚化の問題なんです。実際に結婚した世帯の出産率はあまり変わっていないですね。東京では一人しか育てられないけれ

日時：2015年10月31日（土）19：30～20：00

会場：新町キューブ1F グランパレ

ども、地方では結婚してから二人、三人生む家庭の方が多いです。でも、もう若い女性は口をそろえて出会いがない。特に偶然の出会いがないと言う。イオンでは恋が生まれません。古本屋さんとかで、今の安めの韓流ドラマで必ずあるでしょ。本を落として、同じ物落として、拾って手が触っちゃったみたいな。ああいうのがないダメなんです。要するに広い意味でそういう文化的な施設、青森市にはまだ残っているかも知れませんが、青森、弘前、八戸レベルの街だったらですね、昔は本屋さんとか必ずあったと思うんですね。ちょっと並びのおかしい本屋さんとかあったかと思うんです。そのお父さんは大体、東京で天井桟敷に3年いました、寺山さんに騙されてみたい人が、そこで挫折して戻ってきて親のあとを継いで本屋さんになった。商店街は基本的に潜在能力があるところなので、昔は日銭を稼げればやっていけたんですね。私も東京生まれ、東京育ちですが、駒場という小さな商店街の中で育ったもんですからよく分かります。家賃がいらない商売、日銭さえ稼げれば大丈夫なんですね。だから昔の本屋さんというのは雑誌を売って生計をたてていて、あとは好きな本をならべていればよかった。しかし、今、皆さん雑誌はコンビニで買っでしょ。本はアマゾンでも手に入るわけですよ。だからそういう変わった本屋さんとかも、もう東京や大阪、大都会でしか成立しなくなりました。要するに地方ほど無駄を許容できなくなってしまっているんですね。私達、幻想があるのだと思う、地方、田舎はいんだ、経済面は大変だけれど、のんびりして人情が厚くて、暮らしやすいんだ。そうだったかもしれないけれども、免疫のないところにインフルエンザが入って来るようなもんで、市場原理が入って来るといっきに根絶やしにされちゃうわけですね。イオンの悪口ばかり言ってもしょうがないですけども、実際、今、専門家の間では「イオンは無邪気に出店し、無邪気に退店する。」まったくイオンに悪気はないです。私の母方のふるさと、大館なんですけども、大館が故郷の方もいらっしゃると思いますが、青森市以外の東北の町は駅と商店街は離れてますね。大館も八戸市みたいに離れている。駅と商店街の間にイオンができました。それで商店街は当然寂れました。通行量減りました。イオン退店しました。なんにも残らない。ペンペン草もはえない。

実は今これ被災地で全部おこっている現象ですけど、イオン、ジャスコどんどん出店している。でもおそらく復興対策のお金が引いたら、全部大体平均10数年で退店するといわれている。最短で3年で退店したケースもある。でもこれまったくイオンに悪気はない。

イオンは通行量調査で出店し、通行量調査で退店している。市場原理だけで出店し、市場原理だけで退店する。昔の、たとえば青森ではみちのく銀行とか古い銀行さんとか古いデパートさんの建物って、凄いきちんとした石造りの建物で、要するにその地域で50年100年商売しようと思ったら、そういう建物建てるはずなんです。

僕、今日、新青森から七号線沿いを車でこちらまで連れてきていただいて、もうひどいですよね。全部プレハブみたいですよ。要するに退店することを条件に、その地域から全部お金を吸い上げたら退店することを条件に建ててる。

じゃあ、そういう地方になっているのか。そういう居場所が文化を支えてきたんだと思うんですよね。普段、無口なおじさんが、子どもが立ち読みしとると、ツカツカツカって、お前も、もうそろそろいい年なんだから、そろそろツルゲーネフだろう。もう仕入れといたよ。というお節介をしてくれて、そういうのが、地方の文学少年、文学青年を支えてきたんじゃないか。あるいはそれが、先ほど申し上げた通り、ジャズ喫茶であったり、画廊であったり、写真館であったり、そういうところが、地方の文化を支えてきたじゃないかと思うのですが、そういうものが、地方で支えきれなくなってきた。そこでそういうものをNPOが代わりに行う時代になってきた。

たとえばNPOでジャズ喫茶をやってもら。それを行政が支援する。小さなものを沢山出店していくような文化行政に在り方を変えていかなければ、もう皆さん、重々わかっていくかも知れませんが、もう大きなものはいらないでしょ、沢山ある青森市、そうするとそういうものが必要になって来る。

もうひとつ、今日は秋田の国際教養大学で午前中ずっと授業してましたけれど、先月は弘前大学で3日間、授業しています。昨日は高松、香川県から依頼があっていったんですけど、今、演劇のワークショップをつかった、こ

ちらはなべげんさんの畑澤聖悟さんなどが沢山やられてらっしゃいますけど、こういうのが急速に増えています。

特に東京の中高一貫校ではアクティブラーニングと呼ばれる、こういう授業が非常に増えています。ワークショップ型、ディスカッション型。もちろん、いくつかというのは教育に波があるんですね、ゆとり教育になったり、基礎学力になったりしています。

それで、ここ数年の流れを決定づけたのはこの大学入試改革です。皆さんもご承知かと思いますが、5年後にセンター試験が廃止されて、基礎的な知識を問うような非常に簡単な学力試験。持ち点制でAランク、Bランクとなるわけです。その持ち点を用いて、各大学の門を叩く、各大学の2次試験は潜在的な学習能力を問うような試験を下さい。というのが文科省の指針です。潜在的学习能力、要するに大学でどれだけ伸びるかを図るものです。大学でどれだけ伸びるかなんてわからないだろう、なんだって思われるかもしれませんが、一応文科省の指針はこういうことです。ここら辺は今までありましたね、思考力、判断力、表現力。最近、強く言われている主体性、多様性、多様性理解、協働性、共に働く力。こういうものを図る試験を下さい。こういうのを図る試験とはどういうものか。

実は昨日、四国学院大学では前倒し実施で、指定校推薦の対象だけですけれども、新しい入試を行いました。どういう入試か、事前に公表してあります。たとえば、こういうものです。レゴで巨大な船をつくる。実際に数年前にオックスフォードで出た問題です。

これ単純なんですけども、設計図を描いて、作業の手順を決めて、役割分担をして、途中で間に合わなくなったら変更して、しかも地道な手作業も厭わない。いろんな能力が要求されます。

これは、実際、高校でやろうとしている授業ですけど、AKBともクロと妖怪ウォッチのダンスを実際に踊ってみて、そのビジネスモデルの違いについて考える。これですね。AKBはみんなで踊れるダンスなんですね。だから恋するフォーチュンクッキーとかがyoutubeにでている。ももクロは応援型のアイドルなんで、ちょっと汗をかく、大変そうに見える踊りじゃないとだめなんですね。妖怪ウォッチはもっと小さい子。もっと簡単なダンスになります。これはビジネスモデルと直結しているわけです。AKBは薄く広くCDを売る商売ですね。ももクロはですね。10万人のファンクラブを囲って、一人一人がライブで一万円ぐらいのグッズを買っていく。それで儲ける商売ですね。妖怪ウォッチは子どもが買わけじゃないですね。お父さんお母さんあるいは、おじいちゃんおばあちゃんが買う。だからおじいちゃんおばあちゃんから見て可愛いダンスでなければならない。こういうように、ダンスとビジネスモデルは直結しているわけです。これ、実際、高校で国語と体育の先生が、協同してやる、じゃあ自分の好きなアイドルはどのタイプだろうか、あるいは自分たちで新しいアイドルをプロデュースする。こういう授業です。あるいはそういう試験問題がこれから出る可能性がある。実際ここではこういうものの指標を作って、たとえば、1時間とか1時間半で演劇とかを作る。あるいはレゴで戦車を作る。そういうのに教員が張り付いて評価をします。実は昨日、最初の試験でした。昨日の試験の中でこういう問題を出しました。

以下の題材で、ディスカッションドラマを作りなさい。
『2030年、日本の財政状況はさらに悪化し、ついに債務不履行（デフォルト）を宣言する直前まで進みました。日本国政府は国際通貨基金（IMF）からの支援を受け入れることとなり、その条件として厳しい財政健全化策をとることとなります。国際通貨基金からの要請の一つに、多大な維持費がかかる本四架橋のうち2本を廃止し、1本だけ残すという提案がありました。関係各県を代表して、どの橋を残すかを議論するディスカッションドラマを作りなさい。登場する県は、香川県、徳島県、愛媛県、兵庫県、岡山県、広島県になります。』

このドラマを1時間で創って発表する。そのドラマを創る過程が評価される。それで、実際こういう議論をしているわけです。そこにパソコンを2台置いというて、途中で必要があれば検索して調べてもいい。要するにもう鎌倉幕府が何年にできたか覚えてなくていいですね。検索すればいい。覚えている意味なんもないですね。だからそのときに持っている知識は関係なくて、検索できる能力があればいい。

だが、それが2台しか置いてない。8人のグループに2台しかない。だれが検索するの。一緒に検索するのか、検索係と議論する人を分けるのか。そういう能力が問われる。でも普通の会社ってそうですよ。皆さんが暮らし

ている社会ではそうですね。

ちなみに弘前大学からは要請があったので、どういう試験でやっているか。全部、弘前大学に情報を提供しています。今年からAO入試のこういうタイプのものが一部始まっています。来年以降徐々にこれが広がっていきます。ということは演劇をやらないと弘大にはいけないという時代が来るかもしれない。もうだからアートいいねとか演劇もいいねとか言ってる時代じゃないということです。

私達が一番心配しているのは地域間格差ですね。この大学入試改革の全体的方向が間違っていない。でも今のままで行くと明らかに東京の中高一貫校が圧倒的有利になってしまふ。

東京の中高一貫校の子しか、もう東大にいけなくなるんじゃないか。と考えています。今、東京の中高一貫校はこういう面白い事業を沢山やっているんです。たとえばですね。今、秋篠宮さまの長男の子がっているお茶の水は、私達の業界の間で、もっとも尖がった授業をやっている学校の一つと言われている、あそこは3年生から「市民」という科目があるんですね。5.6年生になると、日韓併合について習って、それで日本人と韓国人の両方の立場に立って劇をつくるような授業を普通にやっている。そういう学校が沢山あるんですね。

私、大阪大学の大学院の方でこういう新しい入試を実際に任されていて、奨学金制度の試験なんですけど、実際そこには潤沢な研究費があったので、40人を20人に絞る試験だったんですけど、2泊3日で40人をホテルに缶詰めにして演劇をつくる試験とか、翌年は映画をつくる試験。その翌年はノーベル賞学者の朝永振一郎先生の「光子の裁判」光の性質をあらわす戯曲を書いてらっしゃる。それを読んで紙芝居をつくる、そういう試験をやってきたんです。で、そういうのを創るために、20人くらい教員が集まって、最初に私が責任者だったので、担当の先生方に宇宙兄弟というマンガがあるんですが、これを全巻買って読んでくださいとお願いしました。宇宙兄弟ご存知の方が多いかと思うんですが、ジャクサ、ナサの宇宙飛行士を作っていく試験の過程が描かれているマンガです。今までの日本の試験は、その時点で知識や情報の量を問うて、上から20番合格、21番以降不合格としています。ジャクサやナサの試験はそうじゃないですね。あれは仲間を集める試験、クルーを集める試験。だから共同体が落ち込んでいるときにジョークをいって励ませるか、新しいアイデアで危機を乗り越えられるか、あるいは地道な作業をいとわないか、長所もあれば短所を補う努力も必要。いろんなことを見て、総合的に仲間を集める試験。これからの日本の大学もそうなっていきます。要するに、自分達は誰と学びたいのか、これは友達だけでなく、職員や教諭も含めて、誰と学びたいか。どうゆう学びの共同体をつくるか。ていうことが大学の責任になる。

大学側がミッションステイトメントという、自分の大学はこういう大学ですよというものを示して、そのためにどうゆう仲間を集めますよっていう試験をしていかなければならない。私、このために世界中の大学の入試制度を調べました。各大学の担当者が口をそろえて言うのが、受験の準備が出来ない問題を毎年考えるのが難しい。受験の準備が出来ない問題を毎年考える。ですから国語の先生方は大変ですよ。今までみたいな受験指導ができなくなる。弘前大学入ろうと思うなら英単語なら3,500覚えなきゃならない、東北大学なら4,000、東大なら5,000だ。それでA判定、B判定、C判定、今までは出たんですよ。でも、レゴで戦車をつくるのにA判定もB判定ないですからね。要するに、今の言葉でいえば、地頭を問うような試験になっている。1～2年の受験対策では無理で、小学生の内からこういうことを沢山経験させてないと、受からない試験になっている。だったら東京の子、圧倒的に有利じゃないですか。

たとえば港区はですね。昨年から、小学生4年生がな。サントリーホールから無料で招待されて、クラシック音楽を聞くことになっています。去年はたしか大野和士率いるリヨン交響楽団を聞いたと思うんですけど、港区の子どもにそんなことする必要ないだろうと思いますけど、みんな富裕層の子どもたちですから。被災地の子どもたち招待してやれと思いますが、港区に悪気ないんですね。サントリーホールは港区にあって、サントリーホールは地域還元でやっている事業ですから。杉並区は佐藤信さん演出の穂谷友子さん主演の児童劇を全員無料で見ます。

みんなそういうことで、ただ単にアートに触れるのではなく、超一流のアートに常に触れる機会を完全に保障されている。こういうものを文化資本と言います。社会学の世界では文化資本、厳密に言うと3つあります。一つは努力で獲得できるものですね。学歴とか資格とか。もう一つは経済力で獲得できるものですね。蔵書とかですね。一番大事なものは身体的文化資本という風に言われています。これはセンスとかマナーですね。これだいたい20歳くらいまでに形成される。と言われてます。一番早いのは味覚ですね。子どもの内にファストフードみたいな味の濃い、画一的なものばかり食べさせていると、味蕾が潰れ

ちゃって、細かい味の見分けができなくなると言われています。おそらく音感なんかもそのぐらい早く形成される。まあ言語活動なんかもうちょっと余裕があるので、たぶん20歳くらいまでに形成される。文化資本は基本的にいいもの、本物に触れる以外に育てようがない。子どもに味覚を覚えさせるのに、美味しいものと不味いものを両方食べさせて、こっち美味しいよねって教える親はいないです。美味しいものを徹底的に食べさせる。自然食品を徹底的に食べさせることによって、危険なものをベッと吐きだす能力が育つ。もっと分かりやすく言うと茶道の焼き物ですね。「いい仕事してますなあ」みたいな。目利きを作る。あれは、ともかく徹底的にいいものだけを見せ続ける。要するに、論理的にいいものと悪いもので比較して、どっちがいいよねって教えるんじゃない、徹底的にいいものを見せる。そうすると必ず偽物がわかるようになるのです。

アートって本来そういうものですよ。そうすると、子どもの頃に超一流のものに徹底的に触れるっていうのが大事になってくる。そうすると東京が圧倒的に有利になってしまいます。だからこそ、地方ほど文化政策をきちんとやらなければならない。

要するに日本は140年かけて教育の地域間格差のない素晴らしい国を創ってきた。しかし、今、文化資本の格差により、もう一回格差が表れてきた。しかも文化資本の格差はですね。ひとつは地域間の格差、もう一つは経済ですね。教育と経済の格差の連関は、皆さん新聞等で見てると思うんですけど、でも文化資本の経済格差の方がより深刻だと思います。だって教育の格差はそうはいっても発見できるじゃないですか。学校があるんだから。

この子頭いいのに、いい子なのに、ちょっと可哀想だな。塾行かせられなくて可哀想だな。どうにかしよう。奨学金どうにかしよう。みんな考えますよね。でも、親がコンサートや美術館に行く習慣がなかったら、自分だけでは子どもは絶対に行かないんです。だからこの経済格差による文化格差はスパイラル状に広がっていつてしまう。要するに今、地域間格差と経済の格差によって、この二つの格差で文化資本の格差がものすごい広がっている。厳しい言い方すると、要するに貧乏な田舎者は芸術に触れなくていいってことになる。でも、この文化資本の格差が、大学進学や就職に直結する時代にこれからなっていく。だからこそ地方自治体が、芸術文化をしっかりとやらないと逆に地域の競争力がなくなってしまいますよということなんです。

最近、昨日か一昨日ですかね、菊池桃子さんが一億総活躍社会の委員になって、一億総活躍社会がわかりにくいからソーシャルインクルージョンの方がいいんじゃないですかと、ちゃぶ台返しをして、話題になりましたが、ソーシャルインクルージョン。要するに、今まで排除されてきた、文化から遠ざけられてきた人を文化によって社会に繋ぎ止めるという考え方。一番分かりやすいのは、ヨーロッパで多く行われているホームレスプロジェクト。ホームレスの方を美術館や劇場に招待したりする。ホームレスの方っていうのは経済的な理由だけでなく、精神的な理由でホームレスになっているので、少しでもアートとかそういうのに触れることによって生きていく気力とか労働力を取り戻していく。これ一番分かりやすい例です。

第5回アートでオン!フォーラム 「～夢が叶えられる街では～」

第2部 トークセッション～（映画文化をとおして）青森と函館どっち？～
出演：あがた 森魚氏（ミュージシャン）、谷田 恵一氏（シネマディクト代表）
進行：嶋中 克之（アートでオン!会長）

嶋中：「函館港イルミナシオン映画祭」の起ち上げと、ボランティアのみなさんが、継続してがんばっていることを教えていただきたいです。

あがた：まず僕は北海道留萌で生まれ、すぐ小樽に引っ越し、父親が海軍関係の仕事なので、3年生の春に青森市に引っ越ししてきました。この青森の町で、小学校3・4・5・6年生の4年間。長島小学校を卒業しました。そこの新浜町の今も残っているマルハの倉庫の裏に住んでいて、小学生の時の楽しみが今日出演の谷田さんのお父さんが経営している奈良屋東映（後に奈良屋劇場、現シネマディクト）に毎週行ってたんだよね。1950年代の終り頃、新町にはたくさん映画館があって夜店通りの角に布田屋さんがあって、

たとえばこういう例もあります。私の経営するこまばアゴラ劇場というのは数年前から失業保険の受給者に大幅な割引をしています。これヨーロッパの劇場や美術館ではどこでもやっている政策ですけど、日本でやっているところはまだほとんどない状態、日本は逆の政策をしてきたんですね。雇用保険受給者や生活保護世帯が昼間にお芝居を観にきたり、映画観にきたりしたら、求職活動を怠っていると切っちゃう政策、それも理由があったと思うんですよ。高度経済成長の頃であれば、景気変動の波はあるけど、半年も我慢すればみんなどうにか就職できた。どうにか就職できる時代の雇用政策なんですね。今の日本の問題は先が見えないってことです。なかなか自分に合った仕事が見つからない。それで、精神的にも落ち込んでいく。

たとえば、日本の社会問題の一つに中高年の男性の孤独死、孤立死があります。孤独死、孤立死は社会全体の大きなリスクとコストになっています。その部屋は臭くなるわ、まわりの人のショックは大きいわ。要するにそうなってくると勝ち組であるはずの不動産所有者にとっても、個人では負えないようなリスクとコストになる。だから私達は考え方を変えなきゃいけない。

雇用保険受給者、失業している方や生活保護世帯の方が、昼間に映画館や劇場にきてくれた。失業しているのに劇場に来てくれてありがとう。社会とつながっていてくれてありがとう。孤立しないでいてくれてありがとう。その方が最終的に社会全体のコストもリスクも下がるからね。私達のコストも下がるからね。税金をそこに使わなくてよくなるからね。だからアートが人を繋ぎ、人を孤立させない役割を果たす。全然夢物語でも何でもなくて。

たとえば私が良く仕事しているバリのジュヌビリエって近郊の町があります。ここは移民の街なんですけれども、劇場の下にカフェスペースがあります。誰でも入れるんです。マッキントッシュのコンピュータが10台くらい置いてあります。これ自由に使えます。午後3時くらいになると、近所の子供たちが集まってきます。要するに家でパソコンが買えない世帯の子供たち。ずっとマックで遊んでるんですね。マンガみたり、ちょっとエッチサイトみたり。でもそれでもいいんです。なぜなら、劇場から一歩外に出たら薬物汚染や青少年犯罪が待っているから、劇場来てくれてありがとう。そのうち慣れてきたら、じゃあ、ちょっとヒップホップのワークショップがあるんだけどやってみないって誘ってみる。居場所と出番という考え方。まず若者たち、子供たちの居場所をつくって、その次に社会参加のつながりをつくるっていう。文化芸術の役割、人を繋いでいく、文化芸術の役割っていうのは非常に大きいし、これからの自治体運営になくてなくてはならないものになっていく。

是非ですね、みなさんの活動をですね。みなさんが楽しむことがまず一番大事なんです。みなさんが楽しくないことは若者たち、子供たち楽しめるわけがない。みなさんの楽しみを是非、外に広げて行って、青森市にとってなくてはならない、みなさんが青森市にとってなくてはならない存在になっていただければと思います。

非常に駆け足でしたが、このあとまたラウンドテーブルあると思いますので、なにかあればお伺いしたいと思います。どうもありがとうございました。

第5回アートでオン!フォーラム 「～夢が叶えられる街では～」

日時：2016年10月29日（土）16：00～17：00
会場：新町キューブ1Fグランバレ

その隣に映画館が明るい輝かしい場所として記憶に残っているんですよ。ねぶたなど、青森の街の独特の風情がいろいろあるんだけど、かなり僕の中に残っている。観に行ったのはチャンバラ映画・時代劇がほとんどだからねえ。お姫様女優も数人しかいなくて、片岡千恵蔵、市川右太衛門、そういう人ばかり毎週のようにチャンバラ映画の勧善懲悪な任侠世界を観せられながら。小学校4～6年の間、なんであんなに夢になって観ていたんだろう。子どもだからわかつちやいないんだけど、戦後の近代の日本人の失われていたものをくすぐって、温かい気持ちにさせたり、エールを送ったりしてくれていたんじゃないかなあ。片岡千恵蔵がゆっくりぶつぶつ言いながら、何かあの姿が戦前・戦中・戦後、僕の生まれる少し前の時代にその人達が、どう

いうものも受けとめ時代をどう受けとるか。青森の街で函館の街で、日本各地でいろいろな人達がどうやって生きてきたのか。また連帯感・義侠心とか日本人の“わびさび”など独特なものが、東映映画でちょっと荒っぽいんだけども教えてもらったのが、奈良屋東映だった。それから函館に暮らすんだけど、函館では全然映画に行けなかったんですね。

高校生になってからちょうど 007、フランスのヌーベルバーグが始まり、ピートルズの『ヤァ!ヤァ!ヤァ!』とか、一番印象に残っているのが、『アラビアのロレンス』ピーター・オートウール、あれを函館の巴座の映画館でスクリーンで観た時、「ああ感動!これが映画なんだなあ」と…チャンバラ映画で育った自分が、函館で感じました。上京してからはヌーベルバーグやアメリカ・ニューシネマを観て、映画っていう文化の面白さを僕なりに知りました。だいたい僕がデビューした後に、日本で映画祭から地域おこしをしようと、ブームが始まりました。その中で、夕張国際ファンタスティック映画祭があり、1 回目が 2 回目にテレビ番組の中で、リポーターとして取材してもらいました。その時、小さな夕張の街で、雪の 2 月に各国からゲストを呼んで、つかの間、数日間、映画祭をやっていて、体感してみてびっくりしたね。映画メディアそのものが持っているものを、地域の若い人達がタランティーノとかいろんな人を呼んで、お祭り騒ぎをやる発想から得る体感が素晴らしいと思ったね。それが 1994 年ぐらい。その頃、僕は「オートパイ少女」という映画を函館で撮っていたので、その上映会をきっかけに映画祭をやたらどうか、と思ったのが始まりです。

嶋中：今日はシネマディクトの谷田さんがお越しなので、今、お話があったお父様の奈良屋劇場の時代から、ご本人が今、独自のセレクトで経営している想いを教えていただけませんか？

谷田：うちは奈良屋東映の時代から、私で 3 代目なんですね。じいさんが、もともと布団屋というが蚊帳屋で蚊帳が売れなくなって、さあ次は何の商売がいいか見渡したところ、周りに映画館がいっぱいあるので映画館を作ろうと……その当時、青森市だけで 22 館も映画館があったので、配給会社がとても相手にしてくれなくて、困ったじいさんが直接、東映の撮影所に行きまして、偶然に撮影所長の伊藤さいさんという人が、旧制の弘前中学校出身っただけで助けてくれて、東映の二番館としてやったのが初めですね。その後、うちのおやじが苦労して東北でもうちだけが“五社”と言われている、東宝、大映、東映、松竹、日活というメジャー作品の二番もあわせて若大将と座頭市を一緒にやるという時代があって。その後、日本映画が斜陽になって、当時のヘラルドとワーナーブラザーズが、当時は二線級の会社だったので B 級映画をやり出して。ピンク映画をやって、次の週は『宇宙戦艦ヤマト』という、めちゃくちゃな映画館であったんですけども、その後に、親父が突然死んで僕の代になって、最初は、店内設備を整えて、椅子までキネットというフランスの椅子にしたおかげで、洋画のメジャーから目をつけられたというか、その作品をやらなくちゃいけなくなって。基本的にシネコンの時代がやってきて、その後、同じ映画をやるのもなんだなあと思って、今の単館系と言われている作品が多くなってきたというのが、シネマディクトの歴史です。

嶋中：先ほどのあがたさんのお話の中でも、映画全盛期時代のスタートとしては、チャンバラ映画などが娯楽としてあって、その後、あがたさんは函館に移られて、その後、ヌーベルバーグや『アラビアのロレンス』で目覚められた、と。実は、私達アートで音楽のある街づくりとして活動してまして、多少、似たものを感じるんですが、日本全国どこでも「アートで地域おこし」と、この 10 年いろいろな地域でやられているんですけども、なんとなく映画産業と似ているところがある気がします。今回、あがたさんをお呼びするにあたって、心にひっかかっていた映画祭のボランティアを起し上げているという話。これが単にブームじゃなくてですね、どうやって継続されていくか、また、街に受け入れられていくかといったところに、非常に今、興味がありまして。函館のイルミナシオン映画祭はもう何年ですか？

あがた：20 年経っています。1995 年なので、一応、昨年で 20 周年です。まったく、それこそボランティアの実行委員の方方で。事業ではないので、あれで儲かっていないですからね…まったくの持ち出しですね。

嶋中：そういった街で継続されているのが非常に素晴らしくて、私達も参考にできる所があるのではないかと。翻って青森をみると、谷田さんみたいに既に一人で努力されて素晴らしい映画を毎週、私達に観せていただいてこれまた素晴らしいです。何かここで時代に繋がる様な、街の資産として起こしていけるような、手立てはないかと思っています。たまたま、今回、あがたさんをお呼びするということで、映画なので、谷田さんへご相談にシネマディクトに行きましたら、『函館珈琲』の大きいポスターがあって、びっくりしたんですけど、この時期に函館に目をつけられたのは、たまたまですか。

谷田：『函館珈琲』上映は 11/12 からなんですけど、今日（10/29 フォーラム当日）から『オーバー・フェンス』という函館 3 部作の最終章が上映になります。原作の佐藤泰志さんという作家、函館の人さえ忘れかけていた方ですが、5 回も芥川賞にノミネートされながら、その当時の選者が、司馬遼太郎、松本清張、遠藤周作、みたいなキラ星のごとくの作家の選考委員の人達のおかげと言っちゃなんですけども、結局、一度も獲れなかった。最終的には自殺してしまった。函館の人は佐藤泰志を忘れてはいけないと『海炭市叙景（かいたんしじょうけい）』から始まって、『そのみにて光輝く』という作品が出来て、今回の『オーバーフェンス』という映画が出来たんです。函館の人の映画にかける想い、あがたさんもやっている函館港イルミナシオン映画祭とか函館っていうのは、熱い部分がとっても人に優しい街です。そういう部分で作る方としては、函館はとても羨ましいと思います。

青森はその反対で、10 年前までは“あおり映画祭”って川嶋さんがやってましたけど、本当に映画祭のおかげで『素敵な夜、ボクにください』というカーリングの映画ができましたが、それ以降、青森市メインのちゃんとした映画が作られていないような気がします、作っていたらごめんなさい。そういう部分では、今は、制作の面ではちょっと青森市は寂しいかなあっていう感じがありますね。

嶋中：そうですね。今回のトークセッションのテーマが、青森と函館どっち？ということで、あがたさんは、どちらにも所属されていて、どっちということはないと思いますが、何かコメントございますか。

あがた：いやあ、谷田さんからいきなり、こういうお話とはね…函館を紹介・称賛までしていただいて、青森の現状をね。今、僕ね、東京の東側の埼玉県川口に住んでいるんですけど、地域性・ローカリティといっても“東京のベットタウン”的な位置なんだけど、荒川ひとつ越えたとそこにはその何かあるわけね。川口で何かやりたいなあと思ったりもするんですけど、東京の脇でこんな事やってもと。まあ何かいろいろやってはいますけど、今は青森・函館となるとねえ。（中略）まず、褒めるとね、結束がいいんですよ。開始当時、中心だったメンバー 10 人位が、今もほとんど全員いますから。あの結束性というのは、どういうところから来ているのかな、と。今、おっしゃられた「海炭市叙景（かいたんしじょうけい）」から始まる函館 3 部作は、菅原さんというシネマアイリス、シネマディクトとちょっと対比しうるかもしれない函館のシニア映画館があってそこの代表者なんですね。営利目的ではあるけれど、市民達が有志で運営している映画館で、そこの代表者の菅原さんが、3 本のプロデューサー。素朴に言うと、うちの映画祭とは別のところにいる方で、ここ数年の流れの中で佐藤泰志さんの作品を 3 本続けて映画化した。これだけすごいことね…2 本目の『そのみにて光輝く』はキネ旬の 1 位とっちゃうし。本当は、うちの映画祭と菅原さんとのチームが一緒になって作ったら、もっとすごい物ができたかもしれないし、菅原さんの判断で菅原さんのチームで独自に作ったことで、この 3 部作が出来たかもしれない。でも、僕は東京の隣にいる川口市にいる人間として、函館なんだから一緒にやれば、もっとできるのにという想いがある。それは、いいとも悪いとも言えない、津軽と南部みたいなのがあったりするもんで、それが全体として青森の力になってるかもしれないし、その様に一体化するとなかなか足並みがそろわないとかあるというのが函館の実情です。

谷田：やっぱり、映画祭をやっている人と僕らみたいに興業をやっている人は、見えない壁があるんですよ…どこかで交わっちゃいけない。そこは、私も川嶋大志さんとは仲良いんですけど、やっぱり映画祭をやっているのであって、映画で飯食ってる人は、その中に入っちゃいけないというのがあるんです。そういう部分では。

（中略）

嶋中：先にまず、函館に結束力という話がありまして、今、また新たに青森“じょっぱり”という話がありましたが、まさに青森は、“じょっぱり”に象徴される反骨精神というのがありまして。谷田さんお一人で、東映の映画館を引き継いで、今、こうやって独自のセレクトをしたものをやられてまして、それこそ“じょっぱり”じゃないかと思うんですけど、そういうきっかけはありましたか？

谷田：きっかけも何も、行き当たりばったりっていうのが本当に正直な話で。今回の『函館珈琲』をご紹介いただいたのは、太秦という配給会社社長の小林さんがあの作品に絡んでいて先に決まったんですけど、その後に違う会社の『オーバーフェンス』が入ってきたっていうのがある。だから、考えはしてるんですけど、作品の流れというのがあって。今、デジタルの世界になってから作品はフィルムの時と比べて 3～5 倍位多いんですよ。ただ、その中でシネコンはあんなにスクリーンがあっても『君の名は。』っていう作品がうけると、3～4 スクリーン写しちゃって、いっぱいあっても作品全部入れるわけじゃない。それも幸せじゃないけど、あぶれた映画そのものがこっちにワットとくるのが現状なんですね。それが全部出来るわけじゃなし、そういう部分ではいろんな付き合いとかタイミングとかが絡んで、うちの映画のラインナップで出来ているところなんですね。

嶋中：『函館珈琲』にあがたさんが出演されていますが、俳優とミュージシャン、どちらがいいですか？

あがた：そういえば、三上寛ってこの人でしょう。寛ちゃんとはデビュー当時よくコンサートで一緒になった。あの方、よく今でも映画に出てるじゃないですか。何か番組を観てて、三上寛が出て役を演じていると、ぶっ、と吹き出しちゃうわけよ…何やってんだ、お前みたいな感じで。物語に入らないで現実に戻されちゃう。僕、自身なんかも、「あがたさん、そこで立ってればいいからね」とかね…割と、まさに初期の頃、『女番長ゲリラ』でなぜか東映映画からデビューして、あがた森魚役でキャスティングされていて。あの時、歌謡曲がヒットして東映の撮影所に呼ばれて嬉しかった。今度、観て下さい。面白い映画ですよ。まあ、それがきっかけだったりもするんですけど、最近のピンク映画とかいろいろごちゃごちゃ出てるんだけど、まあ嫌いではないし。今でも憶えてる。奈良屋東映で映画を観て、国道通って、柳町通って、柳町商店街を歩きながら、俺も映画を作りたいな、ああいった映画は、どうやってできるんだろうと、夢想した記憶がありますね。そういうものが自分の中に蓄積されているから、映画の匂いするな…と思って呼ばれているんじゃないかな、思いますけど。

嶋中：また、話は変わりますけど、函館イルミナシオン、これは毎年、脚本を募集しているんですか？

あがた：シナリオを募集して映画化する。もう、何本か映画化してますけども。青森で映画を撮るのどうとか、函館の映画を撮るのどうとかって言ってもね。映画祭をやる人が映画を作ってシナリオ募集するのも悪いことではないんですが、劇場や配給・興行する側が映画を作ることはどうなのか。函館の菅原さんの場合、すごく成功した例だけでも、まあ大型地域おこしとかご当地ランクで終わっちゃうような。この函館 3 部作はそれをひとつ越えたところで、作品性としてもそれなりに作れたというかね。ただ、それはシナリオを募集して映画化しているという答えなんですけれど、映画祭を運営して、かつ作品を作ったり映画というメディア全部に何かをやって、作品がまあこの程度かっていうものを作れてどっこいどっこいが普通なわけで、そうまでして映画を作ることはどうなのかというのは常々ありつつも、でも函館では一応やっています。何本か作っているうちに、1 本でも 2 本でも、自分達が作った映画でも面白い物が作れるものがあるんだな、と。その礎になる様に、1 本でも作って行こうという、ここまでの流れと現状です。

嶋中：逆に谷田さん、函館の映画祭の状況はいかがですか？

谷田：昨年、副実行委員長の「やまじょう」の、太田さんと飲んだ時に「函館だっ

て青森みたいに、やはり街は死んでるんだぞ」と言われたんですよ。けど何もしないよりも、がんばって住んでいる人達が元気になるためにあると思うですよ。だから、「アートでオン!」だって音楽のある街づくりということで、商店街なり、街が、いろんな人が、関わって元気になると思うんですね。

で、今、若い人が、携帯で映画を観る、スマホを観て終わっちゃうっていうねえ。本当にねえ映画って時間潰しのアイテムになっちゃっているというのが困ったなというのが、まずありまして。寺山修司の「書を捨てて街へ出よう」じゃないけど、今、スマホ捨てて街に出てきてもらわないと、人間社会もおかしくなってくるし、元気な人間が生まれて来ないっていうか、だんだん訳わかんない人達ばかりが多くなってきているのは、ネット社会とか、そういう部分で、やはり映画館で映画を観て帰りに何か食って、とか、ドキドキしながらデートするとか、そういう場でありたいと思ってるんですけど。

嶋中：あのかいスクリーンで感動して、その主人公になりきって街へ出て帰っていくっていう、あの体験というのはずっと心に残っていますし、将来的にきっと、創造活動に繋がるのではないかな、と思っています。もう一つは、従来、青森市と函館市は青函ツインシティとして提携していますので、私達の活動も将来的に函館と一緒にって何か出来ればいいなと。今回、偶然『函館珈琲』を谷田さんが上映されるのを見て、これ映画祭やるのもひとつだな、と思って。かつ、その函館イルミナシオンの皆さんが、もう 20 年余り、長きに渡りがんばっているの、何かヒントをいただいて、私達も一緒にやっていければ、という考えをもっております。

あがた：いいですか、ひとつ。青函交流ってもちろん大事だけれど、徳差健三郎先生じゃないけど、例えば谷田さんがおっしゃったようにスマホで映画を観るのもあってもいいと思うんだけど、俺は隔離されているのが嫌なんだ。僕、エッセイ書いたのがあるんですけど、奈良屋東映について…こんな、小っちゃい写真も載ってるの。2 階までぎっしりのお客さんが入っていて、それ、見るだけで、俺、胸がいっぱいになるけども。娯楽だったし、娯楽がそんなに分散してるわけじゃないから、映画にゴーツと集まっちゃって。それが、いいか悪いか、でもそれはそれで、そこにあった。それを思う時、人が繋がって“おしくらまんじゅう”した時代が、俺たちの子どもの頃で。俺、飛行機より電車が好きだから、青森まで来るだけでヘトヘトだったけど、青森の友達の所に寄って、次に青函連絡船に 4 時間位乗ったら函館に着いて、札幌・小樽に行きたくなったら行って、贅沢な旅だったね。でね、上野から電車に乗って行くと、だんだん東北の言葉が通過して青森の言葉に近づき、車内がほとんど津軽弁になってくるわけだよ。これはね、映画観るより、映画以上に、もう匹敵するようなりアルライブを見るる訳だからさ。いろんな声の、その人達のいろんな日常の話題が聞こえてきてねえ。下手な映画より百倍位面白いよ…これは、旅だよ。でね、青森弁を大事にして欲しいな。だって、今、みんな標準語だよ。ファッションも青森、函館まで帰ってくると、東京でダサイ、古いよ、昨年、流行ったんじゃないかっていうのも、平気で着てたりしてるよ。それが、いいんじゃないか？それが、僕らのアイデンティティじゃないか…。言葉だって一緒なんだよ、青函やる前に青森なら青森、函館なら函館が世にね、名をどうであるかをね。さっきの報告会があったけど、あれは地道かもしれないけど、それは自分達の地域性をどれだけ更に深めて引っ張っていきけるかってことと関連して、すごく難しいこと。今や映画、1 本 2 本作ったことで、いかほどのことであるかもしれないし、ないかもしれないし。「そんなものは、わかんない」だよ。だけどね、メディアからくる言葉じゃなくてさ、自分達がずっと使ってきた言葉を、もっと持ち続けるということが、それ一番考えてるし、それ、目安かもしれない。

嶋中：谷田さん、最後に独自の路線をやられていて、想いだとかあれば最後に聞かせて下さい。

谷田：映画館というのは、自分のところの単体だけではなくて、お客さんが街に来ることなので、街が元気でないとうちも困るっていうのがあって、だいたふ夜店通りも困ってるんですけども、そういう部分では、もっともつとがんばんなきゃっていうのがありますね…がんばります。

嶋中：私達の活動も今度是一緒になって、街を盛り上げて行きたいなあと思っております。それでは、皆さん、ありがとうございました。

会長 嶋中 克之（しまなか かつゆき）

青森市在住 / 会社員 / NPO 法人アートコアあおもり副理事長

2001 年、アートボランティアに参加したこと
から世界観が拡大。以後、地域社会とアートを結ぶイベントに多
数関わり、現代アートの社会的価値をブラックに拡大する白昼
夢を追い続ける。

どこかよその価値観に左右されることなく、心豊かに生き甲斐を
感じて暮らせる街を築けたらどんなにいいことでしょう。
独自の文化的資源をアートの力で再構築して、新たな価値を生み
出すことで経済までも活性化するような、そんな夢を共有できた
時、創造力に火の付いた人々の協働による「文化芸術創造都市」
の姿が見えてきます。
青森には、そうした創造力を内包した人材が多数いることを実感
していますし、アートには、内なる創造力を開示する力が確かに
あります。
みなさんと、これをつなぎ合わせるための活動を継続していきた
いと思っています。



副会長 大嶋 憲通（おおしま のりみち）

1969 年東北町生まれ。株式会社リンクステー
ション代表取締役。青森の活性化を志し、数々
のイベントを主催している。
2014 年には新中央埠頭にて大型野外音楽フェス『AOMORI
SHOCK ON 2014』を開催。



アートでオン！はアートと音楽で溢れかえる街づくりを目指して
発足しました。いわゆる創造都市を創り上げるのは並大抵のこと
ではありませんが、我々は長期的に捉え、青森市に眠る自然や文
化など魅力的な価値を発信し、成長する展開を考えております。
発足から 3 年半が経ちましたが、ファーストステップとして、専
門家を招いた講演フォーラムを開催し、広く市民にアートの重要
性を知って頂くことから始めました。どれもすばらしい内容でし
たが、中でもブリティッシュ・カウンシルの湯浅真奈氏のお話
は、ロンドンオリンピックが芸術・文化によって効果をあげ、
大成功に終わったという、まさに青森市が目指すもので大変参考
になりました。2020 年東京オリンピックが開催されます。青森市
も文化・芸術を発信できるチャンスです。是非、進めて参りたい
と思います。

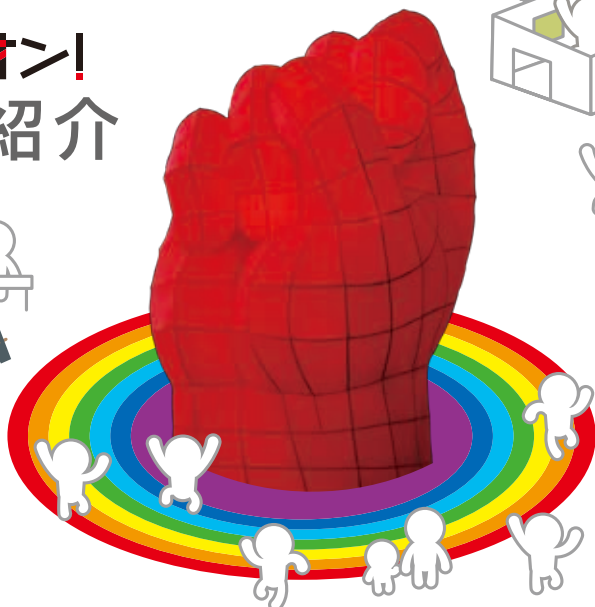
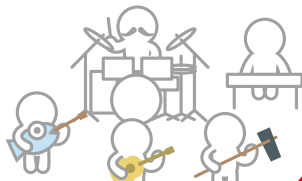


委員 金子 由紀子（かねこ ゆきこ）

秋田県秋田市生まれ。
青森公立大学国際芸術センター青森学芸員。
教育普及担当として、展覧会やプロジェクト
によって芸術や芸術家と地域の人々をつなぐ活動をおこなう。主
な企画に「野老朝雄×青森市所蔵作品展 個と群」（2016 年、国際
芸術センター青森）他。

今年からアートでオン！に関わるようになり、文化・表現活動と
地域振興に対する市民の方発信の企画の多様さと関心の高さを感
じています。その関心の芽が育っていくよう、時に水や肥料を差
し出したり、一緒に草取りをしたりするのがアートでオン！の役
割かと思っています。アートでオン！の委員の業種が様々なよう
に、芸術・芸術家と街、民と官など、それぞれのやり方、それぞ
れの視点が絡み合うことで、青森の文化・芸術が一層豊かなもの
になるよう、お手伝いできればと思います。

アートでオン！ 委員の紹介



副会長 立木 祥一郎

（たちき しょういちろう）

東京都世田谷区生まれ。
1994 年から青森県立美術館開設に学芸員とし
て携わるため青森県に移住。2008 年独立し tecolLC 設立。公共
文化施設や商業施設の計画、展示空間デザインや、地域資源を生
かした商品開発や農産物のブランディングを行う。



棟方志功、寺山修司、澤田教一、ナジーム・最近では古坂大魔王。
なんでもこうも定期的に青森から、時代を塗り替える表現者がで
るのか不思議に思います。青森の風土、歴史、文化が人を育んだと
しか思えない。人々は、祭りを作り創意工夫を繰り返して、今度は
その祭りが、人と地域を育てるのだと。この創造の連鎖が、もっ
と地域の暮らしの活性化に繋がったとき、青森はわくわくするよ
うな「創造都市」になることができると本気で思います。

委員 佐藤 広野（さとう こうや）

1982 年青森市生まれ。
現在、青森県立青森東高等学校美術科教諭。
「あかりのあかり」等、グループ展への出品を
メインとして制作活動も継続中。



アートでオン！にて、委員を務めて二年目となります。私は高等
学校の美術教育に関わる人間として、若者の創造力と発想力を育
成すべく職務に取り組んでいます。
本団体が助成させていただいた団体の中にも若者を巻き込んで地
域を盛り上げてくださっている団体も多くあり、今後の成果に大
きな希望を抱いております。
今、本団体にはより外へと開かれ、様々な非日常的体験を市民に
与えられるような変化が必要です。これまで以上に、助成団体、
アーティストとの「協力」という起爆剤によって、この青森市の
地中深くに眠る地域力を湧き上がらせていきたいです。

委員 川嶋 勝美（かわしま かつみ）

1948 年青森県蓮田村で生まれ、広告会社勤務
などを経て現在は、不動産会社（協同組合タッ
ケンなど）の経営。古い建物再生などで街づ
くりを研究している NPO 法人青森地域再生コムズ、身元保証
など高齢者支援をしている NPO 法人ライフサポート青森の代表
も務めている。



青森市においても少子高齢化などで人口減少時代になり、経済面
のみならず、文化的にも豊かで生きがいのある暮らしができる、
身の丈サイズの都市づくりがますます必要となってきたと思い
ます。
住む人の暮らしに生きがい、潤いを与えてくれるのは、経済の他
に、文化、音楽、芸術。
青森は…いろんな栄養がいつぱいの街。ココロの栄養と身体の栄
養たっぷりの街。
街に音楽が流れ、夜は光が街を彩り、演劇や絵画・書道展などが
頻繁に行われ、老若男女が生きがいを感じ生活できる街。勿論演
ずる人、享受する人、語る人全ての演者は青森人。
そんな都市になって欲しいと思います。

委員 中村 昇（なかむらの ぼる）

（一財）青森市文化スポーツ振興公社 常務理事



アートでオン！規約（目的）には、“本会はアートで音楽のあるま
ちづくり方針の趣旨に基づき…多様な地域の文化的資源にあたら
な光をあて…質の高い独自の文化・芸術の創造を推進することで、
地域の活性化と…魅力あるまちづくりに寄与していくことを目的
とする”とあります。
平成 25 年 7 月にこの会を立ち上げて、早や 4 年。メンバーが変
わる中、迷いながら、ゆっくり歩んできました。
“原点に帰る”という言葉がありますが、規約（目的）を「道標」
としてこの活動を進めていきたいと願っています。

委員 張間 陽子（はりま ようこ）

青森市生まれ。ラジオパーソナリティ・ミュー
ジシャン・女優・競馬騎手研究家。パンクバ
ンド・リアルゴールドの楽曲『わたしはなめ
くじ』が、青森市の道の駅を中心に、局地的ヒット中。出演する
ライブや演劇などは、車椅子のかたも気軽に観覧できるように受
け入れ体制を心がけています。



大好きなライブへ行く！それは、勉強や仕事があっても笑顔にな
れる、魔法のような時間。芸術って、人生を潤してくれますよね。
青森市の音楽や演劇は、出たい人が多く、観たい人が少ない状況
です。優れたアーティストがいても、観続ける人がいなければ、
廃れます。
アートでオン！は、アーティスト同様「観客を育てる」ことが大事
だと感じます。観る力が外出を促し、街の賑わいに繋がるはず。携
帯や PC は便利ですが、小さな画面の世界を抜け出して、どうか、
生身のアートや音楽を体感してほしいと思います。
青森のみんな！スマホを捨てよう！街へ出よう！（捨てなくてもいいです）

委員 竹浪 比呂央（たけなみ ひろお）

ねぶた制作者。1959 年青森県西津軽郡木造町
（現つがる市）生まれ。1989 年、初の大型ね
ぶたを制作。以来、毎年制作。2010 年 1 月 青
森市内に竹浪比呂央ねぶた研究所を設立。ねぶたの創造と研究を
主としながら、「ねぶた」を「紙と灯りの造形」と捉え、新たな
可能性を追求し続けています。



ねぶたを育て、祭りを大きくしてきた青森という土地は、人々
に創造する楽しさとエネルギーを爆発させる喜びを伝えてきま
した。
これだけの財産があるこの街だからこそ、さらに情報を蓄え、個
性を加え、発酵・醸成させ、新たな「創造都市」として独自の文
化を発信していくことができるはずなのであります。
一歩でも前へ、活動を続けてゆかなければなりません。

委員 木村 久美子（きむら くみこ）

青森市教育委員会事務局 文化スポーツ振興課 課長

アートでオン！の活動において、改めて、青森は自然や文化、創
造性豊かな人材の宝庫だと気づき、こうした資源に新たな価値を
見出すことにより、小さいながらも、個性的で面白い、魅力的な
街になれるという希望を抱いたものです。
設立当初、合宿を行い、未来の青森に向け、創造的な人材育成や
外から引き寄せる環境の整備など侃々諤々の議論が交わされまし
た。様々な分野で活動されている方々が、朝まで、純粋に社会を
より良くするために、情熱を持って語り合う姿を見て感動すると
ともに、少しでも形にしていきたいと思いました。
“千里の道も一歩から”。私にとって、この時がアートでオン！の
第一歩だったと思います。

監事 三澤 章（みさわ あきら）

1952 年長野県伊那市生まれ。1988 年に東京か
ら青森市に転居、Studio am COLLABORATION
設立。1999 年、あおもり NPO サポートセンター
設立に参加。活動の一環としてトヨタアートマネジメントをはじ
め、かれいざわアート ICHIBA 等様々なアートイベントを開催し
てきた。



アートとの関わりは、あおもり NPO サポートセンターの設立申
請で県庁に伺った際、廊下で立木さん（当時県職員、現アートで
オン！副委員長）と出会い、トヨタアートマネジメントの青森開
催を要請され協力開催した時からでした。（参加者を思い出すと、
その後の青森県のアートシーンを創って来た方々ばかりです。）
その後、ACAC のオープニングイベント、キッズ・アート・ワ
ールドあおもり、かれいざわアート ICHIBA 等地域づくりとアート
を融合させた様々な事業を展開してきましたが、はじめの一歩は、
立木さんとの出会いからでした。

アートでオン！ 新聞掲載・紹介

2013年から2016年まで、アートでオン！の活動は多くのメディアに取り上げられました。その中から、以下を紹介します（東奥日報社提供）



① 第3回アートでオン！フォーラム「カルチュラル・オリンピック」
東奥日報社 2015年4月8日（水）夕刊1面



② ミチバタ版画
東奥日報社 2014年10月14日（火）東奥小中学生新聞「JuniJuni」1面

アートでオン！ ホームページについて

青森市の文化芸術活動についての情報発信と、アートでオン！活動の紹介のためのホームページを運営しています。

- contents ①
「NEWS」＝青森市内のアートを中心としたイベント情報
 - contents ②
「イベントアーカイブ」＝主催フォーラム・事業の報告
 - contents ③
「アートでオン！な「人」紹介」＝地元アーティスト・文化団体へのインタビュー
 - contents ④
「アートでオン！MAP」＝スマホで使える青森市内のアートイベント等のマップ
- ★ 2014年8月19日に開設後、約2年4か月間で、ユーザー数9,685人／ページビュー 55,667件の利用がありました。

青森市内の文化芸術活動について、掲載情報募集中！
<http://art-on.aomori.jp/>



アートでオン！ “グー”オブジェについて



リンクステーションホール青森 ロビーにて

この青森市で“アートで音楽のあるまちづくり”を実現するためのムーブメントをおこすため、空につきあげた力強い、赤いこぶしのオブジェを「アートでオン！」活動のシンボルとしてきました。青森の伝統文化「ねぶた」の手法で、ねぶた師・竹浪比呂央（アートでオン！委員）が制作。イベントなどの各会場に登場するほか、現在はリンクステーションホール青森（青森市文化会館）のロビーで見ることができます。

街に出よう
小さな発見！大きな感動！！
心の中にガッツポーズ
新たな創造都市へ
アートでオン！
ねぶた師 竹浪比呂央 作

発行 アートでオン！事務局
一般財団法人青森市文化スポーツ振興公社内
青森市堤町一丁目4番1号
017-773-7304
<http://art-on.aomori.jp>

デザイン 櫻 モジロウ

編集 齋藤 純子（カッコトジ）

平成 29 年 3 月発行

